

フランチェスコ・フェッラーラの経済的自由主義

黒須 純一郎

フランチェスコ・フェッラーラの経済的自由主義

黒須 純一郎

# フランチェスコ・フェッラーラの経済的自由主義

黒須 純一郎

## I はじめに

### I-1 評価と業績

### I-2 政治生活

### I-3 本稿の内容

## II 「ナポリ・シチリア間の沿岸航行」をめぐって

### II-1 問題の所在

### II-2 沿岸航行の利害

## III 「イタリアにおける銀行問題」をめぐって

### III-1 問題の背景

### III-2 イタリアにおける銀行問題

- (1) 紙幣の導入, 機能
- (2) 発券銀行規制の批判
- (3) 自由発券制度の有効性

## IV おわりに

### IV-1 額面, 準備金比率

### IV-2 結語

## 参考文献一覧

## I はじめに

### I-1 評価と業績

ブルーノ・ロッシ・ラガッツィは、1955年に『フェッラーラ全集』第1巻の「序文」で、マッフェオ・パンタレオーニがすでに1890年『経済学者ジャーナル』に掲載した「フランチェスコ・フェッラーラの統計学的著作」で指摘した「他者によって再発見されたフェッラーラ学説が、きわめて新しいものとして外国からイタリアに戻り、広大なスケールで受け入れられた」<sup>(1)</sup>という歴史的経緯の指摘に同意しながら、フェッラーラを「〈19世紀の経済学の第一人者〉 *economista principe*」<sup>(2)</sup>と呼んでいる。経済学史的に見ると、フェッラ

ーラが経済学研究を開始した19世紀前半は、経済学史における「イタリア経済学派の全般的消滅期」<sup>(3)</sup>であり、18世紀の「黄金時代」<sup>(4)</sup>に属するF. ガリアーニ、P. ヴェッリ、A. ジェノヴェージほど注目された経済学者は存在せず、英語圏の経済学研究者の目に止まる理論的水準をもつイタリア語文献も少なかった。そうした研究状況の中で、ルイーゼ・エイナウディは、1953年『経済学説の書誌的・伝記的研究』において、「アダム・スミスは、自由主義経済学の指導者で古典派経済学の創始者である」とした後、「フランチェスコ・フェッラーラは、イタリア・リソルジメントの自由主義経済学の第一人者 l'economista liberista principe である」<sup>(5)</sup>と主張している。プスケーは、1960年『イタリア経済学抄史』で、「彼はパレートの時代以前において、ガリアーニと並ぶイタリアの唯一の偉大な経済学者 le seul grand economiste italien である」<sup>(6)</sup>というエイナウディの主張に同意して、フェッラーラの論述を始めている。これらの評価の正当性如何の詮索はさておき、フェッラーラ(1810-1900)が、19世紀初頭のイタリアの困難な研究状況の下で、多大な経済学的業績と多年の実務に基づく金融・財政政策策定への関与を通じて、19世紀後半以降にイタリア経済学を再生させた偉大な経済学者であった事は確かである。

19世紀前半のブルボン支配下のパレルモで経済学研究を開始したフェッラーラにとって、ジュゼッペ・ペッキオの言うように「富に導くそれらの公準が自由に導く道そのものである」経済学は「祖国愛の科学」<sup>(7)</sup>に見えたであろうし、リッカルド・ファウッチの指摘するように、「理論的厳密さと政治的分別を統一できた」故に、「ナポレオンの専制主義の敵J. B. セー、反穀物法同盟の使徒R. コプデン、〈レッセ・フェールの詩人〉F. バステアは英雄」<sup>(8)</sup>であった。フェッラーラは、1847年12月にブルボン支配下のパレルモのトリアーノの高等学校で、「経済学は自由の必要の新たな局面である」<sup>(9)</sup>という開講講義を行って、自己の反ブルボンの自由主義の態度を明らかにした。1848年革命以後ブルボン復帰によって投獄後、フェッラーラは「自発的亡命」<sup>(10)</sup>の道を選んでトリノに移り、カプールの『リソルジメント』紙に協力し<sup>(11)</sup>、決別後は自ら『サヴォイアの十字架』を創刊した<sup>(12)</sup>。その後フェッラーラは、アントニオ・シャローヤの後任としてトリノ大学の経済学講座を担当し(1849-58)<sup>(13)</sup>、後に『経済学講義』<sup>(14)</sup>に結実する講義を行いながら、カプールの発案になる『経済学者叢書』<sup>(15)</sup>を刊行した。それは、英仏を中心とした欧米の経済学者の経済思想をイタリア語訳し普及させようとした画期的なものであり、『フェッラーラ全集』(II-V)4巻全体にわたって解説的「序文」prefazioniが付けられている。「そこには、学説史と経済史に関する説明、著者に対する論評、独創性に富む諸理論が見られる。」<sup>(16)</sup>その中でも、とりわけフェッラーラの理論的貢献は、新古典派に先立って主観的価値論を展開し、代替費用の観点から再生産費の概念を発展させて効用を価値決定要因とし、それを物質的に再生産されえない財とサービスにも適用できるとした事であり<sup>(17)</sup>、更に、イタリア財政学に確かな礎石を置く独自の財政理論を定立した事である<sup>(18)</sup>。

## I-2 政治生活

イタリア統一後の1861年、パレルモに戻っていたフェッラーラは、アントニオ・セツラの要請を受けて再びトリノで会計検査院理事として財政改革に協力し、1867年4-7月の短期間ラッタツィ内閣の財務大臣を務めた。その間、フェッラーラは、統一後の政府の財政需要とプロイセン・オーストリア戦争の戦費調達で深刻な赤字に陥っていた「予算を健全化し、不換紙幣流通の廃止を実現する手段として、教会財産に対する6億リラの課税、その間に民間銀行によって前払いされる租税徴収、不評によって遠ざかりがちな製粉税の創設を提案した。」<sup>(19)</sup>フェッラーラのこれらの提案は議会の強硬な反対にあってことごとく否決され、彼は孤立して財務大臣を辞任せざるを得なくなった。しかし、フェッラーラは、その後も下院議員として経済・金融問題全般にわたって発言をつづけ、1868年にはヴェネツィア商業学校の校長に就任し、同時期に経済学の教授を中心とする「ほとんど専らトスカーナやシチリアで支持者を得た」「アダム・スミス協会」を設立した<sup>(20)</sup>。フェッラーラの政治生活は1880年パレルモ市議員フランチェスコ・クリスピに選挙で破れるまで続いた。

## I-3 本稿の内容

以上のようなフェッラーラの政治学的・経済学的業績をめぐって、1988年10月27-30日、パレルモで「フランチェスコ・フェッラーラ」をめぐる大規模な学会が開催され、彼の多面的な業績が報告され1990年にはその報告集が出版された<sup>(21)</sup>。マッシモ・ガンチは、その「学会の目的」で、フェッラーラの経済思想を貫流するものについて次のように明言している。「パレルモの『統計学ジャーナル』の創立者で指導者であった彼[フェッラーラ]は、最も絶対的な経済的自由主義理論の公然たる支持者で、他のシチリアの経済学者と共に、政府によって実践されているモデルに対抗するモデルを提示した。たとえば、国内関税障壁の撤廃という結果を伴うシチリアとナポリの〈自由沿岸航行〉のモデルを提示した。／この〈異端〉路線をフェッラーラは、彼が責任を負った公的・私的教育運営であれ、大学の講壇からであれ主張して生涯維持した。」<sup>(22)</sup>フェッラーラの妥協を許さない絶対的な自由主義は、あらゆる経済活動への国家介入を排除する彼の信念となった。たとえば、銀行問題をとってみても「19世紀前半にアメリカ合衆国で非常に普及した小銀行の分権モデルに鼓舞されたフェッラーラの自由主義的統合主義」は、フランス銀行やイングランド銀行の「中央集権モデル」ともあい入れなかった。すなわち、「彼の意見では、国家は自由なイニシアティブにもとづく自由な経済発展の保障機能だけを持ってよかったのである。」<sup>(23)</sup>

本稿は、以上のような示唆を受け入れ、学会の成果を踏まえながら、フェッラーラの思想形成期に書かれた「シチリア・ナポリ間の沿岸航行」(1836)<sup>(24)</sup>と、その思想成熟期に書かれ、「投機的資本主義と国家の間に強い絆が創られた国に典型的な国立銀行権力」<sup>(25)</sup>の経済に対する過大な影響力とその不安定で否定的な機能を指摘した「イタリアにおける銀行

問題」(1873)<sup>(26)</sup>を分析し、彼の生涯にわたる理論と実践を貫く非妥協的な経済的自由主義とは何かを検証しようとするものである。

## 注

- (1) Maffeo Pantaleoni, “Scritti di statistica di Francesco Ferrara”, in: *Giornale degli Economisti*, Roma, 1890 II, p. 121.
- (2) Francesco Ferrara, *Opere complete Vol. I*, a cura di Bruno Rossi Ragazzi, Roma, 1955, p. XI. なお、ブキャナン James M. Buchanan が、1960年に「財政の科学：財政理論のイタリアの伝統」(“La scienza delle Finanze: The Italian Tradition in Fiscal Economy”, in: *Fiscal Theory and Political Economy*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, pp. 24-74, 1960. 後, *Economics between predictive science and moral philosophy*, Texas A & M University Press, pp. 317-56, 1987. C. 12. 田中清和訳『公と私の経済学 ブキャナン経済学のエッセンス』, 多賀出版, 1991年, 193-240ページ, 所収。)で、フェッラーラの財政学を含めた経済学への多大な貢献と限界を次のように指摘した事はよく知られている。「古典派経済学のイタリアの財政思想への影響はフランチェスコ・フェッラーラのそれから分離できない。重要な古典派の諸著作が、有名なシリーズ、〈経済学者叢書 *Biblioteca dell'economista*〉を通して1850年代の翻訳によってイタリアの学者に利用可能になった。フェッラーラは翻訳されるべき研究書を選び、翻訳を監修し、彼自身長い序文を個々の精選書に書いた。これらの序文で、フェッラーラは、講義の中でと同様、古典派的思想の多くの点に対して非常に批判的であった。概して、彼の批判は現代の基準によれば卓抜であり、新古典派の貢献の多くを予想していた。彼は主観的価値論者を出し抜いていたし、ある面では凄いでいた。彼が大いに強調したのは、価値論は、彼が感じ・考え・欲する個人であるような行動の元になるもの、「経済行動“economic action”」と呼んだものから出発する全構成物である個人的行為に基づかねばならないという事であった。古典学派は、客観的価値論を構築しようとしたために批判され、おそらくフェッラーラは、富の科学としての経済学を棄却して、重商主義的装飾のすべてを完全に捨て去った最初の経済学者であったろう。価値は、効用と費用の両方で決定され、交換価値はこれら二つの力の比較を表わしている。純然たる原理として、彼は、〈もし〉件の一単位が再生産されるなら被らなければならない費用を意味する、価値尺度としての再生産費という考えを展開した。この原理は、価値を決定するのは財自体ではなく、財によって生み出される効用であるという思想の導入によって、物理的に再生産され得ない財とサービスにも適用が拡大された。」(Buchanan, *Fiscal theory. op. cit.*, pp. 27-8.; *Economics, op. cit.*, pp. 317-8. 田中訳, 195-6ページ。)

ところで、すでに1940年にオーストリア人、オットー・ヴァインバーガーは、「経済思想史におけるフランチェスコ・フェッラーラの重要性」(Otto Weinberger, “The Importance of Francesco Ferrara in the History of Economic Thought”, in: *The Journal of Political Economy*, Vol. 48, Num. 1. pp. 91-104.)を発表してフェッラーラの経済学的貢献を高く評価していた。この論文で、ヴァインバーガーは、まずフェッラーラの伝記的記述をなし、「おそらく19世紀に、フランチェスコ・フェッラーラほど集中的にイギリス古典派経済学研究を修め、同時に彼ほど力強くそれらの理論を批判した経済学者は、イタリアにはいなかっただろう」(*ibid.*, p. 93.)と述べた後、フェッラーラの『経済学講義』の分析を行っている。とり

わけ、ヴァインバーガーは、フェッラーラの再生産費理論に注目し、「再生産費理論は、フェッラーラ以前にはアメリカの経済学者 H. C. ケアリーによって進められたが、フェッラーラはそのアメリカの著述家からまったく独立にそれを発展させた」(ibid., p. 97.) とフェッラーラの独創性を認めている。更に、ヴァインバーガーは、「フェッラーラが、リカードゥ地代理論の強力な論敵であった」事に注目し、「彼 [フェッラーラ] の敵対は、彼が他の諸要因と同等の生産要因と考える土地にいかなる特別の地位も割り当てる事を拒否する事から来ている」(ibid., p. 101.) と論評し、最後に、「フェッラーラの『講義』は、財政学の重要な貢献をも内容としている」(ibid., p. 103.) と指摘する事で分析を終えている。ヴァインバーガーのこの先駆的業績については、フィリッポ・サベッティが、「《公共選択》のシチリアの先駆者か。フランチェスコ・フェッラーラと北アメリカにおける社会科学の発展」(Filippo Sabetti, “Un precursore siciliano di «public choice»: Francesco Ferrara e lo sviluppo delle scienze sociali in nord America”, in: *Francesco Ferrara e il suo tempo, Atti del Congresso*, Palermo, 27-30, ottobre, 1988, pp. 259-272. 以下, *Atti.* と略。) で注目し、「ヴァインバーガーは、イタリアにおけるフェッラーラ思想の発展の政治学的・経済学的文脈を素描した後、分析の大部分の基礎を再生産論において、フェッラーラの寄与の簡潔な批判的評価を提出する」(ibid., p. 261.) と論評している。

- (3) Georges-Henri Bousquet, *Esquisse d'une Histoire de la Science Economique en Italie, Des Origines a Francesco Ferrara*, Librairie Marcel Riviere et Cie, Paris, 1960, p. 68. 橋本比登志訳『イタリア経済学抄史』, 嵯峨野書院, 1983年, XI ページ。
- (4) Bousquet, *op. cit.*, p. 27. 訳, X ページ。
- (5) Luigi Einaudi, *Saggi bibliografici e storici intorno alle dottrine economiche*, Roma, 1953, p. IX.
- (6) Bousquet, *op. cit.*, p. 72. 訳, 148 ページ。ブスケーは、エイナウディからの出所を示していない。なお、マッシモ・フィノーラは、『イタリア経済思想 1850/1950』(*Il pensiero economico italiano 1850/1950*, Bologna, 1980, pp. 249-76.) に、ブスケー上掲書のフェッラーラの部分 (Bousquet, *op. cit.*, pp. 72-93.) のみイタリア語訳し収録している。
- (7) Roberto Romani, *L'economia politica del risorgimento italiano*, Bollati Boringhieri, Torino, 1994, p. 19. アキッレ・ローリアは、フェッラーラが、経済学は「自由の科学」であり、「すべての特権・すべての不正の廃止を望み、それ故、その理想は社会生物学とはかなり異なっていた」と考えていたとする。Achille Roria, *Corsi di Economia Politica*, UTET, Torino, 1953, p. 239.
- (8) Riccardo Faucci, *L'economista scomodo, vita e opere di Francesco Ferrara*, Sellerio editore, Palermo, 1995, p. 20. なお、アドリアーノ・ナルディは、「フランチェスコ・フェッラーラとオーストリア経済学派 比較の第一要素」で、「自由の科学としての経済学」へのフェッラーラの貢献について次のように指摘している。「こうした検討でアダム・スミスの思想に対する彼 [フェッラーラ] の思想の間に、それ以上に彼の思想とジャン・バプティスト・セーやフレデリック・パスティアのような著者の間に存在する一致は、フェッラーラ自身によって証明され、他の著者によって研究された。」Adriano Nardi, “Francesco Ferrara e la scuola austriaca di economia, Primi elementi di un confronto”, in: *Atti.* p. 307. 更に、アドリアーノ・ナルディは、論を進めて、「フェッラーラがオーストリア学派の方法論を驚くほど先取りしていた、と主張する事は場違いのようには思われぬ」と言い、「フランチェスコ

コ・フェッラーラは、ハイエクによって個別化された思想の伝統（「イギリス自由主義」）で十分な資格を付与されうる。それはバーナード・マンデヴィルから始めて、これらを越えて、ディヴィッド・ヒュームや18世紀後半のスコットランドの道徳哲学者（その中には、とりわけ、アダム・スミス、アダム・ファーガソンがいる。）を、エドモンド・バーク、前世紀前半にドイツで活躍したいわゆる法歴史学派の研究者達、F. C. フォン・サヴィニー、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、最後にカール・メンガーとハイエク自身にまで至るオーストリア経済学派を含む。」( *ibid.*, p. 309.) とまで主張するに至る。

- (9) Ferrara, *Opere Vol. I, op. cit.*, p. XII. フェッラーラは1890年7月16日付けの「高名な教授にしてわが最高の友」(ラ・フランチェスカは、この人物をチェーザレ・バルボダと言う。Salvatore La Francesca, “Moneta, credito e banche in alcuni scritti di Francesco Ferrara”, in: *Atti, op. cit.*, p. 343.) への手紙で当時の事情を次のように述懐している。「ヨーロッパ社会を変革する事を予測させた1848年という運命的な年が急に近づきました。我々は、あらゆる危険と犠牲とを引き換えにあらゆる種類の自由の確固たる基礎である、真実と誠実を世界に捧げ、根付かせるために確実な手段として政治学と経済学を選ぶ使命を信奉する事にひき寄せられました。」 Ferrara, *Opere Vol. I, op. cit.*, p. XXXIV.
- (10) *ibid.*, p. XII.
- (11) Rosario Romeo, *Cavour e il suo tempo Vol. II*, Laterza, Roma-Bari, 1984, pp. 276-7.; *Vita di Cavour*, Laterza, Roma-Bari, 1. ed. 1984, 3. ed. 1998. pp. 149-50. 柴野均訳『カヴールとその時代』, 白水社, 1992年。147-8ページ。
- (12) その間の事情については, Faucci, *op. cit.*, pp. 105-109. 参照。
- (13) 当時のトリノ大学には, 「アルビーニ, メレガーリ, マンチャーニ」等のような「新参者, 亡命者, 学部の非加盟員」の教授達がいて, 「アカデミーの側から警戒心をかきたてるのに事欠かない大学教育における重要な革新が問題となっていて」, 「自由, 革新, 新たな思想や精神への開放の雰囲気息づいていた。」(Pietro Maurandi, *Giuseppe Todde un economista alla scuola di Francesco Ferrara*, Franco Angeli, Milano, 1986, p. 28.) という。
- (14) Francesco Ferrara, *Lezioni di economia politica, 2 Vol.* Bologna, Vol. I, 1934, Vol. II, 1935.; Ferrara, *Opere complete* a cura di Pietro Barucci e Pier Francesco Asso, Vol. XI, 1986. Vol. XII, 1992. なお, *Roots of the Italian School of Economics and Finance from Ferrara (1857) to Einaudi (1944) Vol. 2*, Mario Baldassari and Pierluigi Ciocca, Palgrave, Roma, 2001. pp. 379-384. には, 『講義』*Lezioni* の一部(*Lezioni* では, Vol. 2. Capitolo V. *Lo Stato e l'Economia*, 7. Caratteri essenziali dell'Economia Politica. pp. 756-762. に, *Opere XII* では, *Lezione 28<sup>a</sup> 19 giugno 1858* conclusione caratteri essenziali dell'Economia Politica, pp. 235-240.) の英訳 (Essential Features of Political Economy Francesco Ferrara.) が収録されている。
- (15) この『叢書』*Biblioteca dell' Economista* は, Ferrara, *Opere complete Vol. II-V*. に収録されている。B. R. ラガッツィは, 『叢書』第2巻の「II-V巻への序論的ノート」で, ピエトロ・クストディの『イタリア古典経済学著作者』*Scrittori classici italiani di economia politica* と比較しながら, 『叢書』のイタリア経済学史上の画期的意義を次のように指摘している。「クストディ男爵によって, 1803年から1816までに出版された『イタリア古典経済学著作者』50巻は, 一我国にとってばかりでなく一経済学の分野での出版上の最初の大事業であった。しかしながら, この功績ある出版者は, しばしば彼によって各巻に付けられた序論

に満足するに止まり、その時期に外国で出版された基本文献を知らせようとも、すでにアルプス以北の経済学者が提起していた最も広い地平へイタリアの研究者を向かわせようともせず、イタリアの経済学者によって個々の問題について述べられた事を集め、多くの場合忘却から救い出す事に自制した。すなわち、クストディの事業は、一方ではイタリアの経済学が陥っていた停滞状態を反映しており、他方では研究と探求の新たな熱狂を掻き立てる何らの貢献もしていない。」(Opere complete Vol. II, p. VII.)

それに対して、「イタリアが、フランチェスコ・フェッラーラが偉大な経済学者であり、イタリア経済学派を蘇生し得る人物である事を再発見したのは、何10年後のやっと前世紀の半ば頃であった。フェッラーラの極めて貴重な功績は、各巻毎に提示された優れた序文で貢献と欠陥を議論する事によって、『経済学者叢書』を通じて外国に現れた新しい経済理論をイタリアにも広めた事にある。フェッラーラによって導かれた2系列の『叢書』は、記念碑的著作 opera monumentale であり、今日もなお我国の教育の分野で不可欠の作業手段になっている。」(ibid., pp. VII-VIII.)なお、この『叢書』については、Joseph A. Schumpeter, *History of economic analysis*, edited from manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954.: Reprinted by Routledge, Introduction by Mark Perlman, London, 1994, p. 381, footnote 3. 東畑精一訳『経済分析の歴史』3, 岩波書店, 1980年, 802-3 ページ注(三)も参照。更に、フェッラーラの生涯と業績の概括は、ibid., pp. 512-3.; 訳書3, 1077-79 ページ参照。そこで、シュンペーターは、フェッラーラを「最も堅苦しい punctilious 名誉と良心を備えた人物、……自国民を虚心に愛し、失敗にも妥協しない人物で、ほとんど信じられないような不撓不屈の信条的理論家 (doctrinaire of almost unbelievable inflexibility)」, 「本編の第2章 [同所で定義されているシュンペーターの経済的自由主義 Economic Liberalism とは、「経済的發展と一般の厚生とを促進する最善の方法は、私企業経済から足かせを取り除き、それ自体のなすがままにする理論」(ibid., p. 394.; 同, 830 ページ。)である。] で定義されたような意味で超自由主義者 (ultra-liberal) であった」と位置づけ、「しかもこの自由主義からほんの少しでも逸脱するのは、彼にとっては呪われたものにほかならなかった。この点における彼の偏狭さは、多くの自由主義者と同じく、暴君にも匹敵するものであった。一かかると特徴をよく利用する道を心得ていた彼の反対者にとっては、これはもっけの幸いであった。」(ibid., p. 513.; 訳, 1077 ページ。)と適切に論評している。

(16) Bousquet, *op. cit.*, p. 75. 訳, 154 ページ。

(17) パレートは、この論点も含めて、フェッラーラの理論的貢献を次のように表現している。「フェッラーラは、新しい理論に最も関係の深い経済学者である。彼が最適の考察を基礎として持つ正確さを期するためには、彼の理論に数学的形式を与えさえすればよい。」Vilfredo Pareto, *Cours d'économie politique*, Lausanne, 1896-97, Vol. II, p. 101. パンタレオーニは、『純粹経済学原理』(Maffeo Pantaleoni, *Principii di Economia Pura*, Fratelli Treves, Milano, 1931.)で、フェッラーラの「〈物質的〉財と〈サーヴィス〉」の概念 (p. 85.), 「〈とりわけ、価値は個人的な孤立的な経済現象である〉」(p. 173.), 「〈貨幣の現実の役割〉」で「その他の金属は金銀よりも我々の役に立つ」(p. 301.)というフェッラーラの指摘に賛意を表している。なお、松浦保は、近著『オリーブの風と経済学—イタリア人の考え方—』(日本経済評論社, 2001年, 69-73 ページ)で、「フェッラーラはイタリア経済学復興の第一の指導的人物であった。彼はリソルジメントの経済学者の自由思想を快く受け入れていた。その意味では

社会生活や経済生活の各分野において自由の主張者であった。ロマニョージと同様に、「普遍的自由競争」が基本的条件であると主張した。」とフェッラーラを位置づけ、価値論を取り上げてフェッラーラ理論の特色を簡明に説明している。

- (18) 日向寺純雄は、フェッラーラの経済学への貢献を再生産理論と財政理論にあると指摘した上で、とりわけ後者の貢献を次のように簡潔に評価している。「かれ[フェッラーラ]によれば、国家は理念上、分業からの自然的な産物としてみなされ、それゆえその純粋な形態としては、租税は、個人に積極的効用を与えるこのような公共サービスに対する対価と考えられる。租税を価格とみなすこと、および公共サービスの生産性を認めたことの中に、全イタリア財政学の伝統の礎石がおかれたのである。」(日向寺純雄『イタリア財政学の発展と構造』、税務経理協会、1987年、71-2ページ)
- (19) Gilda De Mauro-Tesoro, la vita e le opere, in: Francesco Ferrara, *Lezioni di economia politica*, (2 Vol.) Vol. I, p. XXX.
- (20) Faucci, *op. cit.*, pp. 251-2.
- (21) *Atti*. この『報告集』は、ピエトロ・バルッチ、フランチェスコ・アッソの「序文」と「結論」、マッシモ・ガンチの「学会の目的」をはじめ、「経済学部門」にはリッカルド・ファウッチの「基調報告」を含めて25、「政治学・伝記部門」にはフランチェスコ・デッラ・ペルータの「基調報告」を含めて22の報告を収録している。
- (22) Massimo Ganci, “Le ragioni del congresso «Francesco Ferrara e il suo tempo»”, in: *Atti. ibid.*, p. 21.
- (23) *ibid.*, p. 22. 因みに、チェーザレ・カステッラーノは、シチリア人として「十分に完全な自由の実現」を主張するフェッラーラの態度について、次のように簡明に指摘している。「当時存在した抑圧的社会条件において、とりわけ、国民的領土の統一以前と以後の、シチリアとイタリア南部で確認しうる政治的・経済的自由の欠如の中にその正当化と主要な基礎を見出す。」Cesare Castellano, “La libertà nel pensiero e nell’azione di Francesco Ferrara”, in: *Atti, ibid.*, p. 46.
- (24) “Sul cabotaggio fra Napoli e Sicilia”, in: *Scritti di statistica e di storia di Francesco Ferrara*, a cura di Domenico Demarco, Torino, 1990, pp. 9-91.; Ferrara, *Opere complete*, Vol. I, pp. 91-169. 以下、略号 S.; O. とページ数で引用文末尾に記す。
- (25) Giorgio Candeloro. *Storia dell’ Italia moderna Vol.V, La costruzione dello Stato moderno*, Feltrinelli, Milano, 1976, p. 333.
- (26) “La Questione de’ Banchi in Italia”, in: *Economisti italiani del Risorgimento*, a cura di Attilio Garino-Canina, Torino, 1933, pp. 303-378.; Ferrara, *Opere complete*, Vol. X, pp. 457-554. 以下、略号 E.; O. とページ数で引用文末尾に記す。なお、文中の／は段落の無視、〈 〉は原文斜体、[ ] は筆者の補足。邦訳書の訳は筆者が適宜変更。

## II 「ナポリ・シチリア間の沿岸航行」をめぐる

### II-1 問題の所在

若きフェッラーラは、1836年から「シチリア統計局」によって季刊雑誌として刊行され始めた『統計学ジャーナル』に気鋭の経済学研究者として多くの論文を発表している<sup>(27)</sup>が、

その中で「ナポリ・シチリア間の沿岸航行」(以下、「沿岸航行」と略)は、フェッラーラがシチリア人としての自覚をもって、安易に政府の介入を要請する重商主義的傾向に対抗して最も早く経済的自由主義の立場を表明したものとして特に注目に値する。

フェッラーラは、シチリアの自然的・歴史的に規定された農業特化諸条件<sup>(28)</sup>を踏まえて、まず「沿岸航行」の問題の所在を次のように明らかにする。「シチリアとナポリの自由貿易を維持する事が必要かどうか、むしろ〈沿岸航行〉の廃止が、すなわち、外国人に課しているのと同様な類似の関税制度にナポリ商品が従属する事がシチリアに有益かどうかを検討する事が問題である。」(S. p. 9.; O. p. 91.)<sup>(29)</sup>フェッラーラは、沿岸航行の廃止を望む人々の代表として、マルヴィカ氏とモルティッラーロ氏の名をあげて、彼らの主張をまず次のように概括する<sup>(30)</sup>。

「(1) 両シチリア王国の沿岸航行は、我々 [シチリア] にとって〈不正〉である事。

(2) ナポリとの我々の商業は、我々には有害である事。

(3) それを妨害する事は、その法律の不正に対する、その商業の損害に対する救済策になるであろう事。」(S. p. 10.; O. p. 92.)

これらの主張に対して、フェッラーラは真っ向から対立する見解を示す。

「(1) その法律の精神には何も不正はない事。

(2) すべての利益を、我々はナポリとの商業から引き出している事。

(3) この商業の自由に対する、いかなる障害も、我々には大損害にしかならない事。」

(S. p. 10.; O. p. 92.) フェッラーラは、このような明解な対立図式に基づいて議論を展開していく。

ところで、議論の対象になっている「法律」というのは、「1824年11月30日の規定第14条」の事であるが、フェッラーラは、それが「両シチリア王国相互間の〈沿岸航行は、あらゆる税の導入 *immisione* と抽出 *estrazione* から自由であり免除される〉」(S. p. 11.; O. p. 93.) と定めている事を確認する。その上で、彼は、そこで言われているナポリ市の「消費税」に関して、それは「自治体の問題」であり、「広大で人口稠密な都市の行政当局で準備しなければならない事から生まれた必要であろう。」(S. p. 11.; O. p. 93.) と是認する。次に、フェッラーラは、「『自由な沿岸航行は、ナポリとその市町村で決定された消費税 *dazi di consumo* と、パレルモの灯台のこっちと向こうの領土である他地方で決定された住民税 *civiche tasse* の概念を妨害する事はないだろう。』」(S. p. 12.; O. p. 94.) という第15条にも注目する。フェッラーラは、その条文に対して「我々 [シチリア] に不都合な例外はどこにあるのか」と問い、「著者 [マルヴィカ] が、[シチリアに] 有害だと宣言する精神は、住民が首都に根付き、我々に要求されるのと同額を支払っているナポリ地方でもっと有害になるだろう。」(S. p. 12.; O. p. 94.) と自ら答える。

フェッラーラは、法律(「規定」)の精神をこのように是認した上で、具体的に問題となっている商品の品目分析に移る。「ナポリで消費税を課される品目は全部で63ある。そのうち34は、あるいは短期間の物品であるために、あるいは直接局地的消費に必要であるた

めに、あるいはナポリで大量に生産されているために、我々の輸出に属していない。」(S. p. 15.; O. p. 97.) そればかりではない。その他 29 品目のうちにも「シチリア同様ナポリにも豊富にあり、後にナポリ側が生産者に販売の道を開くほどには消費しないために、我々の外国貿易のテーマにすらなり得ないものが 21 品目ある。」(S. p. 15.; O. p. 97.) すなわち、「酢、グラッパ、カラス麦、牛、紙、ボール紙、トウモロコシ、作業用材木、製材、豆、アーモンド、オリーブ油、大麦、骨、パスタ、干魚、米、サラミ、石鱈、塩漬けサバ、ラード」(S. p. 16.; O. p. 97.) である。このような統計的事実の分析に照らしてみると、「『シチリアからナポリに輸出される〈全農産物〉は、極めて重い関税支払に従属している。』」(S. p. 15.; O. p. 97.) というマルヴィカ氏の主張は誇張でしかない、とフェッラーラは言う。すなわち、シチリアにとって何ほどか重要な輸出品は、29 品目のうち、上記の 21 品目以外のアンチョビ、チーズ、イナゴ豆、小麦、蜂蜜、塩漬けイワシ、マグロの背肉の塩漬け、ワインの 8 品目にすぎない<sup>(31)</sup>。フェッラーラは、これら 8 品目に課される平均関税率を概算 32% と見積もり、これが「我々が嘆く理由のすべてだ。」(S. p. 16.; O. p. 97.) としている<sup>(32)</sup>。

更に、フェッラーラは、「法律」の正当性に関する「マルヴィカ氏の苦情」について次のように主張する。「彼 [マルヴィカ] によってその法律に与えられた解釈は、それが命じられた事柄が専らナポリに有利に向けられていたなら、十分な正当性を持つだろう。しかし、17 条は『同様に、いっそう重い輸出関税を課されている商品の、シチリアからわが領土のこの地方 [ナポリ] に向けての沿岸航行による発送は禁じられる。』と平等に規定している。だから、もし不正があるとすれば、その精神にではなく、規定の結果にあるのかも知れないのだ。」(S. p. 21.; O. p. 102.) こうして、フェッラーラは、この「法律」のもたらす中立的効果を次のように結論付けている。「沿岸航行法は、その精神ではナポリに何のえこひいきも、シチリアに何の敵意も示していないと結論しよう。両シチリア王国の他のどの都市に対してもと同様、ナポリの都市に消費税を維持する必要があった。低減の可能性は考慮されるべきだろうが、それでも損失に関してはたいして大きいものではない。仮にそうだとすると、シチリアと同等の損害がナポリにも降りかかるのである。」(S. p. 24.; O. p. 105.)<sup>(33)</sup>

つづいて、フェッラーラは、「〈貿易差額〉」が逆調だという「野卑な口論」*volgare piato* に対して自己の理論的検討の結果を対置する。「マルヴィカとモルティッラーロによってナポリとの商業に帰せられた損害のひとつは、毎年シチリアが現金で出した損害である。第一に、彼らは、我々が莫大な量のナポリの農産物を受け入れるのに、我々の商品をナポリに送らないと仮定している。」(S. p. 26.; O. p. 107.) しかしながら、「ナポリへの我々の輸出の無効とナポリからの我々の輸入過多という主張を正当化できる要素が我々には欠けている。／もしナポリが、10 年間我々の商品を受け入れずに、彼らの商品を送ったように思われる一連の尤もらしい表が存在するとすれば、私は、スミスやセーが貨幣について書きたびに居眠りしていたのだと公言してもいい。しかし、行き着ける唯一の資料は上に指摘し

た 1834 年の統計だけである。」(S. pp. 26-7.; O. pp. 107-8.) フェッラーラによれば、モルティッラーロもマルヴィカもいずれも自説を正当化しうる十分な証拠を提示する配慮をしていないのである。そればかりか、彼らは「1834 年の統計」の内容を見損なっている。

この統計によると、「ナポリからシチリアへの輸入——906,105.12 オンス」,「シチリアからナポリへの輸出——858,995.20 オンス」,「差異,あるいは輸入超過——47,109.92 オンス [フェッラーラの誤記を訂正]」で表面上確かにシチリアの貿易差額は逆調となる。しかし、これは完全に貿易統計上の見せ掛けの数字に過ぎないとフェッラーラは言う。すなわち、「カラブリア [ナポリ側] には、メッシーナ [シチリア側] 港ほど取引が豊富で活況を呈する快適な港がないので、カラブリア商品を運搬する商人は、彼らの輸送を外国といたう容易に結付け得るメッシーナ港から行うのを常としている事が知られるべきである。」(S. p. 27.; O. p. 108.) だから、「我々 [シチリア] が、かなりの量をナポリから引き出しているように思われる何らかの商品は、大量に外国に送り出している物である。/こうした事実 [統計数字] から、誰もが見かけの輸入が現実のよりも、すなわち、その島 [シチリア] の消費に向けられたものよりもずっと大きいに違いない事を認識するだろう。」(S. pp. 27-8.; O. pp. 108-9.) 結局、再輸出額を勘案すれば、「シチリアは、1834 年に外国に向けて 2,653,165 オンスを輸出し、1,471,467 オンスを輸入した。差額は、1,181,698 オンス [の順調] である。」(S. p. 29.; O. p. 109.)

## II-2 沿岸航行の利害

こうして、フェッラーラは、この統計的結果を根拠に「コルベール主義のパニック的恐怖 [重金主義の混乱]」に対して次のように指摘している。「経済学の初歩的真相は、個人間であれ国民間であれ、商業が常に農産物と農産物の交換によって起こり、この事で他の機能である貨幣は、交換を容易にする機能を発揮するだけだという事である。諸学派の明証に至るまで証明されるこの原理が、モルティッラーロ氏の見解では、常に真相ではないのかも知れない。」しかし、「私は、シチリアでは、我々はすでにこれらの〈決済〉、〈現金〉、〈貸方〉、〈借方〉の幻想を考える事ほど粗雑ではないと、声高に抗議しなければならない。我々は、生憎、諸人民は貨幣を輸出するから衰退するのではなく、怠惰に、無知に、隷属的に生きるから衰退するのだという事を知っている。」(S. p. 29.; O. p. 110.) すなわち、「庶民は、貨幣をすべての価値の排他的手段と考えている……。実際、小麦粉の積荷が、3 オンスに値するという事は、いわば、我々によって〈3 オンス〉に鑄造された銀が、小麦の積荷に値すると言うのと同じ事である。今、一定の生活の用途に応用された質から離れて考えられ、その貨幣の機能で考えられた貴金属は、商品のバーターを容易にする手段にすぎない。」(S. p. 31.; O. p. 112.)

つづいて、フェッラーラは、マルヴィカの原則論的で粗雑な貿易差額論の批判に進む。「彼 [マルヴィカ] は、国民の流通貨幣が減少すれば [貨幣] 価値は上がると言う。ここまでは我々も同意する。その時、貨幣が豊富な時期に決定された年々の支払い全部は、欠乏

期には途方もない額になるだろう。」(S. p. 32.; O. p. 113.) だから、マルヴィカによれば、「『資本自体が制約され、かつて考えられもしなかった損害を被る事になる。資本が減少し、結局工業や商業から引き上げられると、繁栄は動揺し諸国民を貧しくする。従って、必需品は安価になるが、人民は仕事に事欠き、貧困ゆえにそれらを買えない。』(F. Malvica, *op. cit.*, p. 86.)」(S. p. 33.; O. p. 113.)

このようなマルヴィカの主張に対して、フェッラーラは以下のように反論する。「諸国民の現実問題では事は違って進む。僅かな貨幣流出が起こるや否や、もしそれによって価値が少し増加するや否や、商人はそれに気づくだろう。(商人とは、利得機会が提供される所を見つけ出すために、常に用心している勤勉で賢明で、抜け目ない人々の階級を意味するのだから。)従って、貨幣価値が増加したその国では、貨幣を持ってくれば利益を上げられる事が分かるだろう。たとえば、シチリアから流通貨幣の1/3が流出すると仮定しよう。商品価格が即時に約1/3下落する事になろう。しかし、仮説では同じ現象は、貨幣が出ていかないナポリ、リヴォルノ、ジェノヴァでは起こらないだろう。だから、ナポリ、リヴォルノ、ジェノヴァの商人は、たとえば小麦粉が他の所でよりもよい契約が得られる事に気づくだろう。同様に、シチリア以外で買われたいかなる商品よりも、この島では敗者になるほど価格が低くなる事に気付くだろう。最後に彼らの利潤は、小麦粉を得るにはシチリアに銀や金を運ぶ事からくるのに気付くだろう。」(S. pp. 33-4.; O. p. 114.)

すなわち、シチリアでは他地方でよりも有利な契約で小麦粉が得られる事に気づいた商人は、より高率の利潤を得ようとしてそこに金や銀を運ぶ事になる。「それがなされるなら、シチリアから出て行った貨幣が、自然的均衡を再構築するために十分大量に流入する結果になるだろう。こうして、神が望みたもうように[取引が]自由である時、商業は発展する。」(S. p. 34.; O. p. 114.)従って、「マルヴィカによって公言されたこの経済的ヘブライ主義 *ebraismo economico* は、貨幣を徴収し農産物を売りさばくこの強い願望は、完全に間違った仮説に基づいている事が分かるのである。」(S. p. 36; O. p. 116.)

このように、フェッラーラは、折に触れて統計数字による幻惑を厳に戒めながら、常に「<自由競争>と言う神聖な理論」(S. p. 36.; O. p. 116.)に依拠して、マルヴィカ等の介入主義者 *vincolista* 批判を貫いていくのである。

以上のような農工業共存の経済発展の展望を持ち得ないフェッラーラの主張の背景には、教育、資本、テクノロジー、市場、治安、市民的権利等の産業発展のための構造的条件がシチリアには決定的に欠如しているという彼の痛切で妥当な認識がある。フェッラーラは、「ナポリに課された輸出関税は、シチリアへの輸入関税に匹敵し、シチリア産業 *industria siciliana* の保護」に等しいとし、「我々[シチリア]は、同じ製造業 *manifatture* に必要な物資に不足していない」と言うマルヴィカ等に対して、「このような製造業はどこにあるのか。しかし、シチリアでのその絶対的不足を嘆くのは著者の彼だけである。では何を保護しようと言うのか。まだ存在しないありうる未来の書物に書かれる工場か。一度シチリアに染色、白色化等の工場が建設されるために、見通し、気掛りどころではなく、我々

は建設さるべき工場に関係し得るどんな商品の搬出にも障壁をたてる事から始めるのか。少なくとも、企業家が保護関税の必要を我々に示すために現れるのを待つ必要はないだろうか。」(S. p. 22.; O. p. 102.) と、更に「禁止制度のめまい vertigine が我々の間に広がってからすでに 12 年経つ。すなわち、もし関税が工業を生じさせる効果を持ったなら、我々は今日世界の産業全体を征服していたはずの時間が流れた。それでもなお、我々はちょうど 1825 年のままである。」(S. p. 70.; O. p. 150.) と揶揄している。

更に、フェッラーラは、ヨーロッパ的視野の下でシチリアの農業特化による生存の可能性を次のように展望している。「私は、農業がヨーロッパのどこでも進歩している事に喜んで同意するつもりだ。しかし、そのような場合、数でも必要でも消費者が増加している事に同意できよう。1837 年のフランスは、1789 年のフランスが養っていなかった約 700 万人を養っている。今世紀中に大ブリテンの人口は、10 年毎に 15 % の比率で増加した。今日ヨーロッパの王室すべてから尊敬され恐れられているオーストリア帝国のライヴァルであるプロイセン、1,600 万人の住民を持ち、3,000 マイルの車道を持ち、産業と文明を持つプロイセンは、完全な近代国家である。2 世紀前には惨めな辺境伯の領土で、アレマニアの些細な地点でしかなかった。同じかほとんど同じ速度で、ドイツの残りの人口とイタリアの人口は 2 倍になった。スペインやポルトガルですら、怠惰と災害にもかかわらず、すでに以前より人口稠密である。他方で、人種はごっちゃで 10 年間だけで人口が時には 2 倍に達するアメリカが現れる。要するに、到る所で諸世代が互いに休む暇なくせめぎあっている。その間に、住民は洗練され平均寿命は延び、消費の必要は増加する。もしこの一般的増加が否定できない事実なら、他方で諸国民各個の農業のかなりの発展が各個の必要の釣合をとる事からほど遠いという事を認識する必要がある。」(S. p. 46; O. p. 100.) 農工業生産の共存的発展の可能性が閉ざされている以上、フェッラーラには、産業発展の比較優位論に依拠する術もなく、農業における特産品生産の特化と当面互惠性がなくても、諸外国との自由貿易、再輸出努力によって販路・市場を拡大する事がシチリアの望みうる最も妥当な生き残りの道なのであった。

## 注

- (27) この時期にフェッラーラが『経済学ジャーナル』に書いた論文は以下の通りである。「ロマニョージの統計理論」(1836) “Sulla teoria della statistica secondo Romagnosi”, in: Ferrara, *Opere. Vol. I*, pp. 37-88. 「ナポリ・シチリア間の沿岸航行」(1836), 「捨て子について」(1838) “Dei fanciulli abbandonati”, in: *ibid.*, pp. 173-243.; *Scritti. op. cit.*, pp. 93-167. なお、*Scritti.* の編者ドメニコ・デマルコは、この論文に次のような脚注を付している。「この研究で、フェッラーラは次の 2 冊のフランス語文献、J. F. Terme et J. B. Monfalcon, *Histoire statistique et morale des enfants trouvés suivie de cent tableaux*, Lyon et Paris, 1837.; Bernard Benoit Remacle, *Des hospices d'enfants trouvés en Europe et principalement en France depuis leur origine jusqu'à nos jours*, Paris, 1838. を提示し、論及している。」(*ibid.*, p. 93, n. \*) 「統計局設立の最良の方法への示唆」(1838) “Cenno sul miglior modo

di formar uffici statistici”, in: *Opere, op. cit.*, pp. 245-260. この論文でフェッラーラは、「内閣の〈中央集権化〉は、統計の事実では他の欠点があっても、自由で思索的な職業を紐付きで隷属的な労苦に変える欠点を持っている。それは、あたかも我が大臣のトッマーゼオが、パレルモの天文台を維持する代わりに、彼の内閣に〈天文局〉を設立しようとしたかのようであり、P. ピアッツィが、トッマーゼオに従って自分の観察を律する事を余儀なくされたかのようであろう。この比較は誇張ではないと信ずる。フランスの内閣は、トッマーゼオが天文学を知り得たほどには、統計学を知らない。」(*ibid.*, p. 250.)と皮肉たっぷり述べて、統計局の政府権力への従属の不都合を公然と述べている。なお、注(31)を参照。「シチリアの人口に関する研究」(1840) “Studi sulla popolazione di Sicilia”, in: *Opere, ibid.*, pp. 261-322. 「経済学の諸時期」(1841) “I periodi della economia politica”, in: *ibid.*, pp. 383-433.; *Scritti*. pp. 169-223. なお、*Opere Vol. I.* の編者 B. R. ラガッツィは、この論文に次のような脚注を付している。「『経済学の諸時期』に関する労作は、フェッラーラの計画では、以下の研究、『古代の経済学』、『ケネー以前の経済学』、『フィジオクラート』、『スミス学派』、『近代の改革者』、『現代の経済学者』、『経済学の未来』を含むはずであった。しかしながら、実際にはこれらのうちで最初のものだけが完成され、『統計学ジャーナル』*Vol. I, fasc. 18.* pp. 323-377. に発表された。」(*ibid.*, p. XXV.)、「マルサス、彼の敵、信奉者、学説の結果」(1841) “Malthus: i suoi avversari, i suoi seguaci, le conseguenze della sua dottrina”, in: *ibid.*, pp. 435-489. 「統計科学を今日有効に導きうる唯一の方法」(1841) “Dell’ unico modo in cui forse si potrebbe oggidì avviare utilmente la scienza della statistica”, in: *ibid.*, pp. 357-379. この論文は、『統計学ジャーナル』第6巻に現われ(1841年の日付だが、実際には1843年と1846年の間に出た。)フェッラーラが、ナポリでパスクワレ・スタニスラオ・マンチーニに指導されていた『道徳、法律、経済学叢書』*Biblioteca di scienze morali, legislative ed economiche* の1844年6月の冊子に前もって発表した論文の再録である。」(*ibid.*, p. XXVI.) 「郵政改革」(1841) “Della riforma postale”, in: *ibid.*, pp. 323-356.

- (28) フェッラーラが、イタリアでは農業が富裕の唯一のファンドであるとみなしていた事について、サルヴァトーレ・ブテラは、次のように論評している。「たとえ彼 [フェッラーラ] が、重農主義思想の支持者でもなく、シチリアの絶対的農業特化に必ずしも好意的ではなかったにせよ、それでもなお、工業生産の成長が農業から空間を『奪う』かぎり、地方工業の経済的利益は局部的であると確信した。国内農工業生産の共存は、入口と出口で商業的な流れになるので、総合的富裕を増加させる事には役立たない。」(Salvatore Butera, “Realtà e prospettive dell’ economia siciliana in alcuni scritti di Francesco Ferrara”, in: *Atti*. p. 101.) フェッラーラの次の主張は、ブテラの論評の正当性を更に裏付けている。「シチリアは、製造品を持たず、しかもそれを消費する必要を感じる。農産物はあるが、一定程度から過剰になる。これらの農産物を必要としているナポリは、製造品を提供できる。だから、商業は、ナポリの織物とシチリアの農産物を交換することによって、我々がナポリから受け取る織物やモスリンをシチリアで製造する事に専念する無数の職人の作業と同様に、生産的で有益な事業なのである。／だから、我々の中にそのような職人がいないかぎり、ナポリの商業は、単に我々に何ら有害なものを含まないばかりか、多くの恩恵とも考えざるを得ない。本当の害はこの有益な関係を絶つ事にあるだろう。かかる場合には、我々は一方で無駄で譲渡できないために〈有害な〉農業生産に、他方で財の奪取、すなわち、実際に我々が享受する製品の使用に苦しむ事になるだろう。我々の風土と相いれないコーヒー、砂糖、植民地商品

の獲得を阻止する事は実損ではないだろうか。今経済財の指定を邪魔する障害は、風土と土壤の性質に限定されない。そこには道徳的、政治的な障害もある。／今日我々がナポリから買っている400,000オンスの製品を我々が製造する時、自分の富を同額だけ増やすと主張するためには、何が商売なのか、それをどう行うのかに完全に無知でなければならない。この結果は、我々がまったく使用を知らない生産に生命を与える事が問題である場合にだけ起こるだろう。しかし、〈商業を工業〉と取り替える事が問題である時、我々が自国〔シチリア〕に約束できる利益はごく僅かしかない。」(S. *op. cit.*, p. 53.; O. *op. cit.*, p. 133.)

- (29) ここで行論の便宜のために、ファウッチによる当時の両シチリア王国をめぐる状況の要約を記しておく。「彼ら〔モルティッラーロとマルヴィカ〕は、ナポリ・シチリア間の取引の一般的自由を可能にする1824年のブルボン法によれば、一定数の製品と原料に関する若干の例外と共に、ナポリの消費関税がパレルモのそれより高率であったために、シチリアからの輸入が意気阻喪されるので、その島〔シチリア〕の産業にとって有害であると主張していた。結果的に、ナポリに対するシチリアの貿易バランスは赤字であり、この事は貨幣流出と反対に必要とされた島の資本の欠乏をもたらした。従って、ナポリから来る商品にも外国から来る商品に決定されたものと同率の関税を課さざるを得なかった。」(Fauci, *op. cit.*, p. 59.)
- (30) フェッラーラが、「沿岸航行」で批判の対象にしているモルティッラーロとマルヴィカの論文は次のものである。「ナポリ・シチリア間の沿岸航行に関するヴィンチェンツォ・モルティッラーロ男爵の考察」“Considerazioni del barone Vincenzo Mortillaro sul cabotaggio tra Napoli e Sicilia”, in: *Giornale di scienze, lettere ed altri per la Sicilia, a XII, Vol. 48*, 1834. pp. 61-74. 及び、「ナポリ・シチリア間の沿岸航行について—フェルディナンド・マルヴィカの覚書」“Sul cabotaggio fra Napoli e Sicilia — Memoria di Ferdinando Malvica”, in: *Effemeridi scientifiche e letterarie per la Sicilia*, luglio — dicembre 1836. pp. 7-101, Fauci, *ibid.*, p. 84. n. 68.
- (31) 表I シチリアからナポリへの輸出 (1834) (S. *op. cit.*, p. 16.; O. *op. cit.*, p. 98.)

商品	量	価格	関税		
			尺度単位	%	輸出実績
		オンス	オンス		オンス
アンチョビ	cant. 4,056	22,058	1—	約 18	4,056
チーズ	29,478	122,628	1, 8—	30	37,338
イナゴ豆	48,510	23,039	5, 1/2	38	8,393
小麦	67,772	72,131	6, 12	20	14,409
蜂蜜	1,012	21,045	10—	1.6	337
塩漬イワシ	14,300	53,836	20—	17	9,533
マグロの背肉 の塩漬	2,300	10,687	20—	14	1,553
ワイン	botti. 6,294	55,643	2, 12	27	15,102
		281,267		32	91,221

- (32) フェッラーラは、シチリア中央統計局に勤務していた時、「統計学に対する疑惑」“Dubbio sulla statistica” (1835), (in: Ferrara, *Opere. Vol. I, op. cit.*, pp. 3-34.) を書いた。そこで彼は、ジャン・ドメニコ・ロマニョージとメルキオツレ・ジョイアの手法を批判的に検討し

ながら、統計学が、「偶然と経験的に予定された規則集の単純な規則で手当たり次第に集められた数字の寄せ集め」や「表面的で混乱を招く組み合わせ」に墮す事なく、経済学に貢献するための手順をを次のように説明している。「統計学者の手を通過する極めて多数の出来事で、どのような核心が選ばれたり拒否されるかは、理論的に定義される事ではなかろう。ある現象をそのような集合の中に配列してみたまえ、そうすれば、それはそのような原理の明白な証明になるだろう。それを別の集合に移し換えてみたまえ、そうすれば全く違った事を示すだろう。最後に、それを第三の考察に委ねてみたまえ、そうすれば、それが重要でない事がわかるだろう。だから、統計的事実をそれらの間に有効に結びつけるには、それらの精査を準備する前に、我々が目的とする対象を十二分に議論する事が必要である。」(ibid., p. 12.)更に、フェッラーラは、「原理、過程、発展」の視点から、比較条件の探求の必要性を次のように強調している。「〈現状〉という観念は、所与の段階の単なる総計では構想されず、その総計が諸条件の一つでしかない比較に依存している。通り過ぎる過程のむき出しの情報は、必要であるとすれば、総計、観念だろうが、判断、正確な尺度ではない。作られたものに価格を与えるためには、なお作られるべきものに目をやらなければならない。統計学者が、野良で働く人数、労働日数、資本、道具、費用、農産物を数えるや否や、彼にはなお、意味を欠いたこれらの抽象的な数字を関連づける要素を追及する仕事が残っている。イタリアが、何ユゲルム jugeri の土地を耕し、何ブッシエル moggia の小麦を刈り取り、何千頭かの羊を飼育していると言う事は、更に労働がなされなければならないのか、他の諸国民も同じ事ができたのかどうかお分からないのだから、要するに、その数字が産業上幼年期を意味するのか成熟期を意味するのか分からないのだから、イタリア農業がどこまで到達しているのか言う事にはならない。しかし、統計学者が提示する諸要素が出合う標準型を探せば、我々は、計り知れない困難がふくらみ、それを解消する希望を欠いている事を知るだろう。」(ibid. pp. 17-8.)見られるように、フェッラーラは、統計数字自体に引きずられる事なく、それらを目的意識の手順に従って比較操作する事によって初めて経済学への応用が可能となり、経済理論の構築に貢献できると考えるのである。

因みに、サルヴァトーレ・ラ・ローザは、「フランチェスコ・フェッラーラと統計学」で、フェッラーラの統計学への関心が、「土地の正確な面積、住民数と生活条件、生産総額、それらの通常消費、労働価格、統計、財政、人民を統治する技芸自体の基礎となるような他の事柄が正確に知られなかったヨーロッパの唯一の国 [シチリア]」とその著の「序文」で言われているニコロ・パルメーリ Niccolo Palmeri の『シチリア農業の現実的困難の原因とその救済手段』(Sulle cause delle difficoltà attuali dell' economia agricola della Sicilia e i mezzi per porvi rimedio, Stamperia Reale, Palermo, 1826) によって開かれたと述べている。Salvatore La Rosa, "Francesco Ferrara e la statistica", in: *Atti, op. cit.*, p. 135. なお, Silvana Patriarca, *Numbers and Nationhood, writing statistics in nineteenth-century Italy*, Cambridge University Press, 1996. p. 28, pp. 57-9. pp. 90-94. も参照。なお、フェッラーラは、「沿岸航行」で「小麦粉の搬出不足」が即「農業の墮落」ではないという文脈で、「国内消費が増加したために小麦輸出が減少した事は、すでに我がパルメーリによって注目されており、それは十分起り得るし実際にも起こったのだ。」(S. p. 40.; O. p. 120.) とパルメーリに言及している。

- (33) フェッラーラの経済発展論としては消極的で柔軟な態度に対するファウッチの次の一連の指摘は妥当である。「トスカーナ人のラッファエッロ・ランブルスキー、コージモ・リドルフ

ィからロンバルディア人ステファノ・ヤチーニに至る当時のイタリアの経済学著作者の大部分は、蓄積原資は農業にしかあり得ないと考え、発展のために必要な資源を都合するために、その近代化が進められねばならないと指摘した。カルロ・カッターネオも、フェッラーラと大体同じ年に、農業と工業2部門の、しかしながら、前者が後者のために発展の前提条件を提供する事になる相互依存によって、経済発展の過程の非常に明快な文章を書いた。」(Fauci, *op. cit.*, p. 33. カッターネオの農工連環発展論に関しては、さしあたり、黒須純一郎『イタリア社会思想史』(御茶の水書房、1997年)、第2部第4・5章、参照。)然るに「フェッラーラの〈ライトモティーフ〉が愛着を抱くであろう条件は、たとえ条件の互惠性がなくても、こうして両者〔シチリアとナポリあるいは諸外国〕の産物による『販売』が拡大されるから、商業取引の増加がそれらの両地域にとって有益であるという事である。その利益はたとえ一地域だけが一方的に自由貿易を開いてもあり得るだろう。」(*ibid.*, p. 59.)

### III 「イタリアにおける銀行問題」をめぐって

#### III-1 問題の背景

1860年3月サルデーニャ王国を中心にして統一イタリア王国が成立した。行政的司法的統一に前後して経済的秩序の統一も行われた。まず、「関税統一は、一部は併合に先立つほど速やかに実現された。ピエモンテ関税の導入とサルデーニャ王国・新領土の関税障壁の撤廃が、ロンバルディアでは'59年7月、パルマ、モデナ、ロマーニャ諸地方では'59年10月10日、トスカーナでは'59年10月29日、ナポリ諸地方では'60年9月24日、ウンブリアでは'60年10月10日、マルケでは'60年10月30日、シチリアでは'61年1月1日に実施された。」<sup>(34)</sup> つづいて、公債統一を規定する二つの法律が、'61年6月に下院で、7月に上院で可決された。「1861年7月10日に公布された第1の法律は、ナポレオン1世によってフランスで制定されたものに似た公債の大法典、すなわち、国家債務の返済が長期化され、元利支払期日の決まった債務が記載され、それに関連した機能が登録された登記簿全体を制定した。1861年8月4日に公布された第2の法律は、イタリア政府によって認められた旧国家の債務の大法典に登記を決定した真の固有の統一法であった。」<sup>(35)</sup>

更に、貨幣統一法案が1862年8月24日に公布された。この法律は、統一イタリア王国の新たな貨幣秩序を最終的に決定し、旧貨幣の回収と交換の基準を確定した。しかしながら、「旧貨幣の回収と交換は、イタリア全土で同じリズムでは起こらなかった。それらは、実際に1865年の終わりにはすでに結末を迎えていた北部・中部イタリアでは急速に進んだのに、南部のブルボン銀貨の回収は極めて遅かった。」<sup>(36)</sup> しかも、1862年の法律は、発券銀行の多重性の問題には触れなかったし、1866年にはアントニオ・シャローヤによる銀行券の強制流通・不換紙幣制度の導入が、旧貨幣の蓄蔵を促す結果になったために交換作業を更に遅らせた<sup>(37)</sup>。

ヨーロッパの金融市場は、1862年と1863年の成長局面の後、1865年末には後退局面に入った。「景気後退と危機は、好況局面での実質投資の過剰と南北戦争によって決定された

莫大な国債の'63, '65年間のヨーロッパでの募集, '61, '65年間の大量の木綿輸入の支払いのためのヨーロッパからインドへの莫大な現金流出, アメリカの戦争終結と木綿価格の突然の下落, '64年のドイツ・デンマーク戦争の終結から'66年の[プロイセン・オーストリア]戦争の勃発までのヨーロッパでますます増幅した国際関係の不安定と緊張状態のような, 一連の政治的起原の併発的原因に帰せられた。』<sup>(38)</sup>国内的には, 「1866年に[イタリアの]財政状況はほとんど二者択一の余地を残さないしがらみに縛られていた。7億2,000万里ラ赤字は, 9億2,600万から13億3,100万里ラになる実質歳出の増加に起因し, それに6億1,700万里ラの実質歳入によって部分的にのみ対応し, 土地と家屋の直接税から10%これを補填した。」当然「公債で赤字増加を補填する命令と高利子率で貯蓄不足を充足する要求が出てきた。すなわち, 公債証券の実質利子率は1866年には7.77%に上昇し, 割引率は, ロンドン市場での4%の割引率と3.25%の政府証券の利回りに対して, 7%と9%の間に維持された(最高12%)。/国外から受け入れられた借り入れ総額は, 18億から46億リラに増加した債務総額に対して, 6億4,000万里ラから17億リラになった。」しかしながら, 「公的欠損の増加は, 主として投資過程と相関していた。鉄道の即時の実質生産性によって最近定式化された準備金の認識深化とともに, やはり公共事業は, とにかくこの国を下部構造上の後進性の条件から近代国家の台座にまで移動させる意義があった。/国家は破産の亡霊に立ち向かうために国有財産の譲渡問題に同時に着手した。1862年の法律によって決定された国有財産の譲渡のための手続きはゆっくり進み, 国家は1864年には正統的どころではない処置によって, 13万エイカーの売れずに残っている国有地と教会所有地の大安売りに着手した。」<sup>(39)</sup>

### III-2 イタリアにおける銀行問題

前節で概観したような情勢下で, すでに財政実務家, 下院議員として活躍していたフェッラーラは, 多くの財政・金融問題に取り組み, 積極的に発言していた。「それらの中で最も有名なものは, フェッラーラが, 彼の教義《徹頭徹尾自由》libertà in tutto per tuttoを貨幣, 信用に応用した銀行, 予算, 銀行券に関するものであった。」<sup>(40)</sup>このような問題状況を踏まえて本節では, フェッラーラが, 信用制度と紙幣流通量に関する問題を真正面から扱った「イタリアにおける銀行問題」(以下, 「銀行問題」と略)を主として取り上げ, 彼の銀行政策を貫いている基本的思想を検討する。この論文は, イタリア財政の専門月刊雑誌『新選集』Nuova Antologiaの1873年10月号(pp. 351-381.), 11月号(pp. 622-652.), 12月号(pp. 883-913.)に編集者への手紙の形式で掲載された<sup>(41)</sup>。

#### (1) 紙幣の導入, 機能

フェッラーラは, まず紙幣導入にまつわる不信と受容の歴史的経緯を確認する事から問題の検討を開始する。「一般に, 無記名の紙幣に対する嫌悪は, フランスから我々に伝えられました。〈紙幣〉bigliettoという言葉は, 初めてヨーロッパに導入されてから今日では2

世紀以上になりますが、誰かが他者のためにある金額の支払いを認める商業債権 *obbligazioni mercantili* に与えられた名称でした。……この支払いを約束する形態は、導入されるや否や取引で普及し、純粹で単純な〈手形〉*biglietto* 以上に〈為替手形〉*biglietto di cambio* のようにも呼ばれていました。時代、場所、受益者等の様式に応じて、〈意図、住所、指図手形〉*biglietto a volontà, a domicilio, all'ordine* 及び軍人〈名誉手形〉*biglietto d'onore* まで導入されました。／現れた経済的便宜は非常に評価されました。裏書の必要なしにマニュアル的に転送されました。人物の同一を確認するか委任状を示す必要なしに現金化されました。」(E. p. 310.; O. p. 466.) 金属貨幣とほとんど同等に扱われた手形は、当然さまざまな手法で悪用され、フランスでは1713年にそれを禁止する布告が出されたものの、ナポレオン商法典によってそれは禁止されなかったし、ドイツの商業立法でも債務の合法的手段として認められた事にフェッラーラは注目している。

そのような紆余曲折を経ながらも、フランスの手形の採用は他のヨーロッパ諸国にも浸透した。「少しずつ〈銀行券〉*biglietto di banco* の資格を帯びてきた持参人一覧払手形 *biglietto al latore* は、国家であれ、特権を与えられた団体であれ、独占的になっていきました。……、まずロンドン〔イングランド〕銀行の特権がつくられましたが、狭い境界内に定められました。その時、大ブリテンの残りの全部では、私的機関か公的機関のいずれによっても、自由に銀行券が生み出されました。しかし、1844年に有名なピール条例が発令され、その時以来、この自由は、直接にであれ間接にであれ、今日のように手足を切断されたのでした。／わがイタリアには、持参人一覧払手形の一般的禁止を告知するか、それらを専ら特別機関に許可する何らかの法律があるでしょうか。何もありません。偶然、禁止がサルデーニャ〈国立銀行〉が創設された1850年7月9日の法律に見られると、時折信じるように仕向けられました。しかし、純粹にピエモンテのその法律は、決してイタリア王国では公布されませんでした。」(E. p. 312.; O. pp. 468-9.) 見られるように、フェッラーラは、銀行政策における手形振出と銀行券発行の大幅な自由を容認すべき事<sup>(42)</sup>を示唆し、「銀行券」、「紙幣」の内実を次のように指摘する。

「紙幣は、貨幣 *moneta* ではなく、貨幣で支払うという単なる約束です。貨幣は、紙幣がそれ自体何の価値もなく、一定貨幣量で兌換されるか、兌換される確実な可能性を持たない限り内在価値を何も獲得しないのに、それらが造られた金属の内在価値をもたらしませす。」(E. p. 314.; O. p. 472.) 更に、貨幣鑄造が、その刻印によって「国家の特権」に属している事が確認される。すなわち、「国家が、その製造者として介入するのです。造幣プレスでそれを造幣し、カットし、重量、純度を確認するのです。肖像を刻み、それにとって最も都合のよい呼称で呼ぶのです。何の目的ででしょうか。重量を測定し、純度を分析する面倒から市民を解放し、量や純分の保証人になり、偽造や密輸を阻止する目的です。……。それが製造した貨幣は、各商品が誰かの手を通過するのと同様、人の手を通過する純粹単純な〈商品〉*merce* です。それ〔国家〕は、貨幣を売るほか、生産物かサービスと交換に貨幣を与えるほかないのです。それは、生産物かサービスの価格しか獲得しませ

ん。」(E. p. 317.; O. p. 475.)

フェッラーラによれば、国家は貨幣の「製造者」にすぎず、貨幣も「商品」でしかないのだから、同じく法律による特権付与が行われさえすれば、銀行券(紙幣)を貨幣と呼び、流通の便に付するの自由である。しかし、「その紙幣が〈流通するだろう〉かどうか聞く事は、何日に雨が降るのか知っていると思い上がるようなものです。すなわち、大衆がそれを望めば〈発行〉になるでしょうし、大衆が紙片よりも金属を望めば、発行されないでしょう。」(E. p. 320.; O. p. 479.)<sup>(43)</sup> 従って、政府に実行可能な銀行政策の範囲は自ずと明らかになる。「もし政府が監督している団体に、契約違反とか法律の侵害を発見したと思っても、その権限はそれに警告を発し、直接的方法でそれを告発する事がそれに限られた義務でしょう。しかし、政府の行動は完全にここまでです。契約や法律の違反がなされたかどうか、懲罰するならどの方法でか、なされた営業許可が撤回され、罪を犯した団体の事務所を閉鎖し、結局、その手形を無効とする等々の公的強制力に命令されざるを得ないかどうか決定する事、このすべてが、明白にその権限から出て行って、司政官の仕事になるでしょう。」(E. p. 321.; O. p. 480.)

## (2) 発券銀行規制の批判

ところで、フェッラーラが「銀行問題」を書いた当時のイタリアの焦眉の急の経済問題は、発券銀行の規制をめぐるものであり、とりわけ、地方銀行の紙幣発行の経済過程への影響力如何であった。すでにイタリア国内には「あらゆる型と色の小銀行の紙幣が市場に流れています。無知とか怠慢によって住民はそれらを単なる信用紙幣としてでなく、法律が強制流通特権を付与したものとまでそれらを取り違えて、受け取り渡したからです。更に、かなり以前から小額紙幣は大銀行の印刷機以外で発行されていました。」(E. p. 322.; O. pp. 481-2.) すなわち、「大雑把に言えば、小規模銀行によって発行された通貨総額は、3,400 万リラを少し上回るまでに増加し、大規模な発券銀行のそれは、14 億 9,000 万リラでした。前者は、事実か権利によってすべての〈信用貨幣〉*fiduciaria* で、持参人が要求するや否や、それを隠せました。後者は、極めて大きな地域で強制流通を得ました。だから、15 億 2,400 万リラの集積で、小規模銀行は 3,400 万リラを表し、〈45 分の 1〉の部分を表しています。もしすべての銀行が一日で〔債務〕不履行になっても、イタリア人はそうなったかどうかにも気づかないでしょう。」(E. p. 326.; O. pp. 486-7.) それでもなお、プレミアムの増加、不可避的危機、価格の暴騰、財政の硬直が起こるたびに、新聞等が集中的に攻撃するように、「これらすべてが、発券銀行によって強制流通に投げ出された 15 億リラのせいではなく、小規模銀行の 3,400 万リラの信用貨幣流通のせい」(E. p. 326.; O. p. 487.) にされるのである。フェッラーラによれば、このような誤った認識は、イタリアにおける現行の銀行制度が混成状態で不安定だとする一般的先入観にもとづくものであった。

しかしながら、「法的には、それ〔現行の銀行制度〕は、非常に自由が拡大された制度でしょう。商法典も新たな銀行の設立を禁止しませんでしたし、立法権力の急速で予防的な

同意を口実にする事はまったくの誤りです。商法典も他の法律も銀行に持参人、あるいはそれを受け取り譲渡する大衆に紙幣を使用する事も、どうしたら金属貨幣ができるのかを広める事も禁止しませんでした。流通状態にあるのが妥当である額だけに限界が課されました。しかし、この限界は銀行間で変化し、全銀行に共通の原則によってではなく、単に各行に特有の慣例によって決定されました。」(E. p. 330.; O. p. 493.) 他方では、「我々は、イタリア資本が徐々に2億リラへと増加していく巨大銀行 [サルデーニャ銀行] を持っています。多数の支社、その割引、有価証券明細票、多額の利益配当、市場価格が額面価格の2倍以上になる株式によって、それは過度に自己を支え、その指図を信頼する者に服従する王国の商人階層全体を自己の馬車につないでいるのです。それによって、市場の最大の変化が容易に決定されます。なぜなら、彼らの利益は、危険な投機熱に解消されて、次いで、最も堅実な銀行の存続を危うくして恐慌を勃発させるために、せいぜいのところ割引の抑制で事足りりとするからです。あらゆる証券取引所では、彼らの代理人の顔色がまずものをいい、彼らの供給と需要が価格全体の成り行きを決定しているのです。」(E. p. 331.; O. pp. 493-4.) 見られるように、フェッラーラは、経済変動の主要原因が、ジャーナリズムの政府寄りの無責任な論調に反して、多数の小銀行の紙幣発行はもとより銀行の貨幣政策にもなく、国家権力と独占的金融機関の癒着に基づく相場操作に大きく左右されている事を率直に指摘しているのである<sup>(44)</sup>。

しかしながら、マウロゴナート等のフェッラーラの論敵達は、銀行券流通に対する国家介入による強制的抑制を、従って、サルデーニャ銀行の権限強化と影響力増大につながる銀行数の制限を主張してやまない。「彼ら [マウロゴナート達] は、銀行の倍加を不可避免的に〈信用〉紙幣のひどい過剰、手形の〈洪水〉を決定する確かな事実として取り上げるのです。それらによって、彼らは直ちに〈恐慌〉と呼ばれる天変地異の必然性か、少なくとも緊急の危険を感じるのです。外観はかなりもっともで一般に信じられている理論です。我々は、シスモンディの博愛主義的教説を読み始めて以来、若い時代からそれを学びました。もしある銀行が一線を越えて〈発行〉できたとしても、団体が必要としない部分を払い戻すので、常に〈払い戻すので〉訂正されざるを得なかったでしょう。私は、自由帝国のどこでも〈過剰な〉紙幣流通現象を探し求めました。私は、それをヨーロッパ、アメリカ、アジアの小国や大国にそれを探しましたが、新たなイギリス領諸国、ピール以前の繁栄していたスコットランド、広大なシナ帝国、辛うじて6万の住民でおよそ10の銀行を維持し、70種類以上の異なった紙幣を平穩に使用する勇気をもっているジャージー島にも、決してそれを見出しませんでした。」(E. pp. 355-6.; O. pp. 499-500.)

### (3) 自由発券制度の有効性

しかもフェッラーラの考えでは、もし銀行がかなり大量の自己紙幣を移転したとしても、何か銀行内部や国内的原因によってそれが行われるとは限らない。当時のイタリアを巻き込むヨーロッパの政治・経済情勢に基づく外部的原因による事もあろう。「もし外部的原因

が存在し、恐慌がそれに続いたとしても、原因を〔紙幣〕発行の自由に見出す事は、石を投げた手をなめながら、石に噛み付く犬と同じ論理です。／恐慌は、計算の誤り、突然の需要、誇大な期待、取引所での投機の激しさ、人間が節度を越えるほど生産し、買占め、輸入し、価格を上下させ、すべてを思惑し、一日で裕福になりたい時、すでに引き起こされたのです。今世紀中に、我々の目に触れ、紙幣流通がそれを発生させたと考える事ができない多くの事の一つずつ検討してみてください。すべてが、しかも忠実に再版されて見て取れる型は、1825年の大ブリテンのそれ〔恐慌〕にあります。<sup>(45)</sup>／我々は、銀行券が何等目立ちもしないのに、茶の恐慌、それ以上に綿の、他の繊維の、鉄道のそれを見なかったでしょう。オランダの花の動揺によって、〈チューリップの恐慌〉によって、まさに奈落の底へまっ逆さまに落ちようとしていた時、一体そこに近代的な紙幣があったのでしょうか。」(E. pp. 337-8.; O. pp. 501-3.) フェッラーラは、恐慌その他の経済危機の原因を、ただ一面的に貨幣(紙幣)的原因に見出そうとする論敵達に対して、さまざまなレヴェルの非貨幣的原因にも求めようとするのである。

それどころではない。フェッラーラによれば、逆に投機による攪乱に対して信用紙幣流通が救済策になるケースもある。「取引がこの方向〔投機〕に狂ったように巻き込まれ、価格変動が誘導剤 *revulsione* になるおそれのある時、取引が感じる自然的衝動が抵抗するようになるのです。その時、投機物件の所有者は、商品、証書、事業、何であつても、その価値を維持しようと思えば、ためらう事を許されずに、締結された契約を履行するためにそれ〔紙幣〕の信用に訴えるのです。／ハスキッスン氏が、過剰流通の障害を止めた唯一の方法は、その抑制どころではなく、新たな慎重な発行によってそれを支える事に気づくだけ賢明であつた時である1825年恐慌におけるイギリスの例を引用すれば十分です。」(E. pp. 338-9.; O. pp. 503-4.)<sup>(46)</sup>

それに加えて、フェッラーラは、信用紙幣流通には実際に更なる莫大な利益があると言う。「持参人一覧手形に、一つの象徴のように、経済活動という現象のすべてが要約されています。手形(紙幣)は、割引、為替、信用、未来の前払い、金属貨幣のあり得る欠陥の排除、人類の二つの大敵である時間と空間の排除です。」従って、「手形(紙幣)を禁止したり制限する事は、人類を肺病やみにし、彼らの活力に毒を盛り、彼らに怠惰と不能を宣言するに等しいのです。」(E. p. 340.; O. p. 505.)<sup>(47)</sup>このようないつもの辛らつな表現をもって、フェッラーラは、紙幣流通量をめぐる銀行問題の解決は、基本的にできうる限り巨大国立銀行の独占とそれに引きずられる中央政府の政策介入を排して、小銀行も含めた地方銀行の信用に基づく自由な紙幣流通の自動調節機能に任せたいと主張するのである。

## 注

(34) Candeloro, *Vol. V, op. cit.*, p. 230.

(35) *ibid.*, p. 240.「最も偉大なイタリアの銀行家の1人で、若い頃はマツティーニ主義者で後に

穩健派になったリヴォルノ人、ピエトロ・バストージ Pietro Bastogi は、最後のカヴール内閣と最初のリカーソリ内閣の財務大臣として公債統一を準備し実行した人であった。」(*ibid.*, p. 240.)

- (36) *ibid.*, p. 239. ラ・フランチェスカは、その時期の貨幣流通状況を次のように説明している。「不換紙幣制度を導入した1866年5月1日の同布告〔国立銀行に1.5%の利子で2億50,000,000リラの国家への貸付を命ずる国王の布告〕は、事実ナポリ銀行とシチリア銀行が、それらの規約によって預り証、銀行証書、紙幣を発行し続け得る事を決定した。／不換紙幣制度の導入まで、紙幣発行権は非常に慎ましく利用されていた。11億リラの金属貨幣に対して、2億63,000,000リラの信用貨幣と14,150リラの銀行券が流通していた。」La Francesca, in: *Atti, op. cit.*, pp. 357-8. なお、「シチリア銀行に紙幣発行機関の最終的整理を与えた」のは、「1867年11月の法律と1867年12月5日の国王の布告」(*ibid.*, p. 358.)であった。
- (37) ジーノ・ルツァットは、率直に次のように言う。「強制流通の導入は、何よりも公共財政の緊急の必要を準備し、銀行を救済するための手段であったとしても、現実には結局……イタリア人大衆に何とか信用流通を慣れさせる手段でしかなかった。」Gino Luzzatto, *Storia economica dell'età moderna e contemporanea, parte II l'età contemporanea*, Padova, 1960. p. 389. あたかもフェッラーラは、『新選集』*Nuova Antologia*, 1866年5 (pp. 21-43)・6月号(pp. 343-379.)に、「イタリアにおける銀行手形の強制流通」“Il corso forzato de' biglietti di banco in Italia” (*E. op. cit.*, pp. 379-426.; *O. Vol. X*, pp. 265-326.) (以下、「強制流通」と略)という論文を発表している。ここで、フェッラーラは、経済学者が一般的に、紙幣を「貨幣の粗悪化の極限として考えられる致命的発明」、「公信用の無遠慮な暴力」、「資本の破壊、全般的破産」、「政府の任務に高められた偽造」、「最も切迫した必要という名目だけで辛うじて正当化され得る国民の大災害」(*ibid.*, p. 381.)とするのは、その価値下落への不安からであると言う。それは、ローの手形、アッシニア、グリーン・バックス、シチリアの証券等の連想から来ていると考えられる。確かに「常に墮落した紙幣使用に経済的損失の大きな基礎がある。」たとえば「もし熱のある時に一見するとその国が活況を呈しているように見えても、少し経てばそれは健康の活力ではなく、熱の興奮状態がそれを侵しているという事が十分に分かるだろう。フランス革命の時も〈アッシニア〉の最初の洪水は、繁栄のめまいであった。……。結局450億フランのフランスの富が、短い時間の流れの中で世界の舞台から消失したのであった。それらは、世俗の労苦が蓄積し復讐、野心、栄光の果てにうんざりしたフランスの善人が、恐慌が過ぎて最初から再生産し再企画し始めねばならない富であった。」(*ibid.*, pp. 405-6.) それに対して、フェッラーラは、「将来の支払いが少しの不安も呼び起こさず、同時に取引のすべての必要にそれを当てはめる事で、いささかの不自由すら引き起こさない紙幣が真の完全な貨幣であろう」(*ibid.*, p. 390.)と述べる。その上で、「紙幣の固有の価値」(*ibid.*, p. 391.)は、つまるところ発行量だから、仮に信頼するに足る政府と銀行が紙幣の量的調節さえ怠らなければ、一時的な価値下落はあっても永続的下落はないだろうという楽観的な理論上の見通しを示すと共に、「政府は大衆の信頼するに足りず、国立銀行も最も新鮮な繁栄の外観を花開かせ」(*ibid.*, p. 415.) ないばかりか、「金属準備の限界、〈王立委員会〉の監視、収支発表、政府が信用の乱発に対して我々に自衛する事を強く求めたその大規模装置すべてが、大衆の利益を保護するためにごく僅かな効果しか発揮しない」(*ibid.*, p. 422.) イタリアの現状を慨嘆している。なお、シャローヤ政策の問題性とそれに対するフェッラーラの批判については、ガブリエッラ・ジョーリが、「アントニオ・シャローヤの財政制度に関す

るノートとフランチェスコ・フェッラーラの諸考察」で概説している。Gabriella Gioli, “Note sul sistema finanziario di Antonio Scialoja e le considerazioni di Francesco Ferrara”, in: *Atti*. pp. 275-305. 特にフェッラーラのシャローヤ批判については, pp. 282-5. 参照。

- (38) Candeloro, *op. cit.*, p. 296.
- (39) La Francesca, *op. cit.*, p. 355. 因みに「1866年にフェッラーラによって構想された方針に基づく1867年の法律は, 全体として60万エイカーの販売をもたらした。」(*ibid.* p. 355.)
- (40) *Lezioni, Vol. I, op. cit.*, p. XXIX. なお、『経済学講義』の編者, ジルダ・デ・マウロ・テゾーロは, フェッラーラの特に著名な議会演説(報告)として, 次のものをあげている。「金, 銀の効果の不評に反対する(1868年1月14日), 不換紙幣流通の廃止に賛成する(1868年3月2日), 不換紙幣流通と国家・国立銀行間の関係に関する(1870年7月20日), 発券銀行協会に関する(1874年2月13日), シチリアでのタバコ専売制度に反対する(1874年5月9日), 貯蓄銀行制度計画に反対する(1875年4月19-20日)演説, 国庫業務移動のための国立銀行とのカンブレイ・ディグニィ Cambray-Digny 協約に関する報告。」(*ibid.*, p. XXXV.)
- (41) フェッラーラは, 1866年1月から当時の首都フィレンツェで, ピサ大学, ローマ大学の経済学教授であったプロトノタリ Francesco Protonotari に指導され, リカーソリ Bettino Ricasori の協力を受け, ル・モニエ Felice Le Monnier から, この雑誌を出版し始めた。Fauci, *op. cit.*, p. 209, p. 231 n. 25, 26.
- (42) フェッラーラは, 「強制流通」で, 紙幣流通に対する国家のあるべき機能を次のように指摘している。「将来の償還で得られる信用の程度が第一に基本だろう。我々はすでに, 紙幣自体が金属貨幣か他の現実価値への変換で人々に信用されるか否かによって, すべてに妥当するか無になりうるかを見た。従って, 良好な信用が疑われない政府, 財政が十分管理されている国, 習慣的に平穩, 勤勉で, 征服の馬鹿げた野望や軍事的栄光の熱望に無縁の国民は, 偶然的閉塞の時に価値低下の些かの危険もなしに, 紙幣を適用できる。」(*E. op. cit.*, p. 406.; *O. op. cit.*, p. 292.)
- (43) ファウッチは, フェッラーラが, 「紙幣発行の自由の理論〈フリーバンキング〉*free banking*」(*ibid.*, p. 170.)の論点で, ケアリー Henry C. Carey に同意したと言っている。因みに, アキッレ・ローリアは, フェッラーラをそもそも貨幣鑄造の自由を私人に委ねるべきだとする「超自由主義的著作者」*scrittori ultra-liberisti* としている。Achille Loria, *op. cit.*, p. 495. なお, マッシモ・フィノイアは, 「イタリアにおける近代経済思想の起源」で, 貨幣問題に対するフェッラーラとハイエクの主張を比較検討し, 「ハイエクは, 良貨を造幣する事を私企業に認めなかったために我々は常に悪貨を持ったのだという命題から出発して, 貨幣に対する政府独占と国家的貨幣制度を私的発券銀行間の自由競争と取り替える必要があると主張する」(Massimo Finioia, *All'origine del pensiero economico moderno in Italia*, in «*Rassegna economica*», anno L. n. 6, novembre-dicembre 1986, p. 1217.)事に注目し, ハイエクがフェッラーラを知らず引用しなかったとしても, 両者に思想的に密接な親近関係がある事を示唆している。
- (44) ラ・フランチェスカは, 「投機的資本主義と国家の間の絆」(カンデローロ)の事実を次のように指摘している。「国立銀行に対する国家の負債は, 1870年5億50,000,000リラにのぼり, 1865年の1億リラによる国立銀行の信用紙幣は, 総額で1870年には8億リラにのぼった。更に, 国立銀行のヘゲモニーは, 1860年の8から, 1870年の68になった支店の増加が証明する。」La Francesca, in: *Atti. op. cit.*, p.358. なお, Romeo, *Cavour, Vol. II*, pp. 686

-7.; *Vita*, pp. 239-40. 訳, 228-9 ページ, 参照。

(45) フェッラーラは、1825年の大ブリテンの恐慌の原因を次のように説明している。「我々の敵達が、生じた事を理解しているとは思えません。それ〔恐慌の原因〕は巨大で異常な企ての全般的な精神錯乱です。徒党を組み、思い込みをぶち上げ、不意にいなくなるしかない〈株式〉を現金化する詐欺師の群れです。彼らは積荷のすべてを狂ったようにアメリカへ送り、鉱山の果てしない開削を提案し、技師や機械を送り込みました。欺瞞的イメージをかきたて、ただ株式が60リラから2,000リラ以上の利益になるようにするためにです。」(*E.* p. 337.; *O.* p. 502.)

(46) フェデリコ・カフエ編集の『叢書』第10巻 (*Opere complete, Vol. X, op. cit.*, p. 504.) では、脚注(a)で、ハスキッソンを次のように紹介している。「ウィリアム・ハスキッソン。その国〔イギリス〕の関税・貨幣政策に関する議論で注目に値する *notevole* 影響を及ぼしたイギリスの政治家。彼の貨幣に関する著作については、本巻500ページ参照。」更に同所の脚注(a)には「『貨幣とその代替物』 *Della moneta e dei suoi surrogati* (フェッラーラ)の序文に付された銀行に関する『書誌』参照、現行版第5巻、ローマ、1961年、328ページ他」との指示がある。なお、フェッラーラは、すでに1857年に「ピエモンテにおける経済的自由について」“*Della libertà economica in Piemonte*” (in: *Rivista Contemporanea*, marzo 1857, anno V, Vol. IX, pp. 345-363.) で「銀行問題」に触れ、次のような見解を示している。「信用のテーマでは、自由の原理を無効にしうる特別なものは何もないのか。何もないし、すでに最も幅広い経験が豊富にそれを証明する。諸君は、銀行券流通の〈濫用〉を恐れている。すなわち、その経験が、一般に、〈恐慌〉があまり致命的でない二つの国は、銀行券流通をいっそう自由のままにする国である事を証明した。スコットランドには、今までに〈一度すら恐慌〉がなかった事を、アメリカでは(その例が非常に評判になった)恐慌は、一般に知覚し得ない足跡しか残さず、立法者が介入する場合にはいっそう深刻になり、自由が十分である場合には何でもない事を証明した。」(*E. op. cit.*, p. 451.)

更に、彼は、『新選集』*Nuova Antologia* の1880年12月15日号(pp. 703-722.) に発表された「編集者への手紙」の体裁の論文「強制流通の廃止」(1880) “*L’abolizione del corso forzato*” (in: *E. ibid.*, pp. 425-443.) でも一徹に同趣旨の主張を繰り返している。「信用流通は、どんな社会にでも一度十分に導入されれば、どんな出来事でも根こそぎにできないように決定されます。紙幣は、それらを受け入れる大衆と貨幣に換える銀行との間を行き来します。ある額が銀行に再流入し、他の額が流通に止まります。……ある時には、それらは砂丘を飛び越え、他の時には、世界的破局を仮定するのでもなければ、まったく空のままではありえない貯水池に再び引き戻されます。現在ではほとんどあり得なくなっているローの大災害が問題にならないかぎり、すべての銀行の金庫に流れ込む事は決して見られませんでした。最も騒がしい恐慌の時でも、一定額は流通しつづけるか、抜け目ない投機業者の手にも止まるが、銀行の外部に釘付けされたように止まるのです。」(*ibid.*, p. 437.)

(47) ジョヴァンニ・パヴァネリは、「フランチェスコ・フェッラーラ思想における貨幣と不換紙幣に関するノート」(Giovanni Pavanelli, “*Note su moneta e corso forzoso nel pensiero di Francesco Ferrara*”, in: *Atti*, pp. 327-341.) で、この箇所を引用し、「しかしながら、それ〔紙幣〕は完全な交換可能性を確認するので、必然的(で十分な)条件であった。交換可能であるかぎり、当然流通している貨幣は決して過剰ではありえなかったであろう。ここに、彼の銀行学派への同意が無条件で現れている」(*ibid.*, pp. 334-5.) と述べている。

## IV おわりに

### IV-1 額面、準備金比率

以上のような主張の当然の帰結として、更にフェッラーラは、発券銀行の健全経営の内容にも具体的に言及し、政府が立法を通じて、手形、紙幣発行をとりわけそれらのサイズ、額面を決定するのは余計な事だと批判している。「あらゆる場所とあらゆる時間が、できれば他の型よりもある型を役立てる事にその利益を見出すのです。スイスの小さい自由な銀行は、最小の型によって、カントンからカントンまで、5、10、20、及び50リラというように異なった手形をもっています。スコットランドとイングランドの間には、1リラ・スターリングから5リラ・スターリングまで（わが国の25リラから125リラまで）間隔があります。アメリカでは、最近の強制流通の必要性がなくても、幾つかの同盟諸州でドルの100分の1（わが国では100分の50）から発行されました。／かつて小額紙幣の流通が不安を引き起こしました。多くの私の同時代人は、長い抵抗の後、どれほどの不安をもってカヴール伯が、手形が100リラから求められた請求に譲歩したかを記憶しているでしょう。彼は、流通に大きな混乱を生み出さずに、それほど〈低額〉に下げる事を考えつかなかったのです。その時ピエモンテでは、昨今のフランスにおけるように、小額紙幣が金属貨幣を駆逐してしまつて、必然的にその国を〈貧しく〉せざるを得ないと恐れられたのです。」（*E. p. 347.; O. p. 515.*）しかしながら、フェッラーラは、この問題への20年にわたる観察結果のすべてがその懸念を払拭し、「貨幣と信用紙幣が十分平和共存しうると我々に確信させ」たと主張する。すなわち、「立法者がどんな型を決めるかは何の役にも立たないし、少なくとも無駄な作業になるでしょう。その型の唯一の有効な審判者は、常にそのまなざしの下で、それらの手形が奉仕する住民の要求、便宜、必要を持つ唯一の実体である銀行そのものです。」（*E. pp. 347-8.; O. p. 515.*）

つづいて、フェッラーラは、サイズ、額面の問題との関連で、「はるかに重要で困難な問題」として、手形の規則的償還を大衆に保証しうる事になる「準備金」の問題を検討する。「準備金 *riserva* は、銀行にとって、商人にとっての〈金庫〉*cassa* であるという事です。それは、銀行の財産を形成しませんし、その資本でもありません。銀行は、もしその収支で〈負債〉に対して〈資産〉の大きな余剰があれば、大金持ちの確固たるものでしょう。それは、収入、安定財産、財源です。質がよければ〈無限の〉支払い能力を保証するという事です。／ですから、準備金の必要は明白です。大衆の目は常にそれに向けられています。たとえ自分のものでなくとも、それらの金庫が金であふれてはじめて、最大の信用を鼓舞する事がすでに壞疽にかかった銀行にみられるのでした。反対に、金庫の準備金が減少するや否や、大衆の不安が頭をもたげ、引き出しが広がるのです。」（*E. p. 354.; O. p. 523.*）その準備金の比率については、フェッラーラは、統計的数値がいかにかに当てにならないかを鋭く指摘する。「多くの人が極めて神聖な基準と考える33%のそれ[比率]は、1832年イギリスの銀行が多年にわたり準備金の3倍以上発行する必要がなかったという単なる観察

から偶然生まれたのです。しかし、当時大ブリテンの外では、次にそこ自体でも、33%は、25%とか50%でもよいほどの幻想的で恣意的な比率であると見られました。……。フランスの銀行は、たとえ法律によって余儀なくされはしなくても、常に金庫に流通量の1/3に等しい金属総額を維持しようと殊更に努力した銀行の一つです。しかし、まさに統計的には、いかにこの規則が純粋に虚構で資料的に尊重し得ないかを見たほうがよいという事です。」(E. p. 358.; O. pp. 528-9.)<sup>(48)</sup>

しかしながら、フェッラーラは、自ら合理的根拠となる比率を明示する事なく、準備金の問題については、イタリアを含むヨーロッパの銀行の実績に鑑み次のように指摘するに止まった。「その本質において、準備金は、ある場所と他の場所で、時間に応じて、銀行と銀行の間で、同じ銀行でも日によって常に等しくありません。稼動している最中の人間の性格や習慣、彼らの事業の性質、銀行と彼らの関係の種類や程度のすべてが、多かれ少なかれ準備金の必要を決定し、それを定義できない可変の条件の中で構成しなければならないのです。」従って、「私は、立法者がそれらの準備金の割合を銀行のために懸命に固定しようとするのは、無駄で軽率な心配だと評するのに躊躇しません。／逆に、決まった準備金が法律のテーマではないと納得しましょう。それを測定し、訂正し、日々の変化のすべてを適用しうる人は、自分の仕事の実践で得られた経験によって、彼らの持つ生きた利害によって、市場の必要と可能性を探っている銀行の理事その人です。……。ここでも最も健全で確実な状態は、純粋に単純な自由であります。」(E. pp. 360-1.; O. pp. 531-2.) ここには、ピエモンテ主導の北部中央集権政府と投機的傾向を強めていた独占的金融資本勢力の結合、それらの顕著な利権的ヘゲモニーに対して、基本的にシチリア(及び南部)の連邦主義者として分権主義政策によってその専一的利害を制限し、諸地方の小銀行も含めた各銀行の自律的自由を確保しようとするフェッラーラの「自由主義的統合主義」(マッシモ・ガンチ)の立場が示されている<sup>(49)</sup>。

#### IV-2 結 語

以上の検討から明らかであるように、フェッラーラは、思想形成の起点においてまずシチリア人として当時のブルボン政府の政治経済支配に抵抗しながら、本土のナポリを含む中央集権的圧力に強く反発する立場をも表明し、「国内」自由貿易にもとづくシチリアの自然的歴史的に規定された社会的基盤による選択の余地のない農産物輸出国への道を示すために「沿岸航行」を書いた。更に、ジャーナリズム、アカデミズムでの多くの持論的・理論的営為と中央政府での政治的实践・挫折を積み重ねた後年には、19世紀前半のアメリカ小銀行の分権モデルに基づいて「自由主義的統合主義」の立場から、当時イタリア政府が銀行運営で基本的に依拠していたフランス、イギリスの中央集権的モデルに囚われることなく、それらからも自由に有益な事例を引き出しながら、長大な論文「銀行問題」を書き、介入主義論者、社会主義者を含む多くの論敵に対して各銀行の大幅な活動の自由を強く主張した。フェッラーラは、「銀行問題」で「生活を実践する事は、我々にとってすべて

交換する事です。しかし、交換の思想が自由の思想から論理的に引き離して理解できないように、我々にとってすべてに自由が必要です。」(E. p. 332.; O. p. 495.) と述べている。これは、冒頭で示唆したイギリス古典派経済学を文化的後背地とするフェッラーラの信条吐露であり、彼の生涯にわたる非妥協的自由主義の信念にほかならない。

注

(48) 表II 「地方銀行の準備金と流通量の比率」(E. op. cit., p. 327.; O. op. cit., p. 488.)

	銀行名	所在地	準備金 -リラ-	流通量 -リラ-	準備金と流通量の比率
1	人民農業商業銀行	パヴィア	54,984	316,310	準備金の5倍以上
2	人民信用銀行	ボローニャ	100,259	581,684	概算6倍
3	人民信用銀行	イモラ	15,985	96,337	準備金の6倍以上
4	人民農業相互信用銀行	ソンチーノ	32,991	200,000	- 6 -
5	人民銀行	ヴィジェヴァーノ	50,998	324,450	- 6 -
6	人民の銀行	モンタルティエーノ	15,151	100,000	- 6 -
7	人民銀行	コモ	101,840	741,178	- 7 -
8	人民銀行	レッコ	48,943	350,000	- 7 -
9	人民農業相互信用銀行	クレーマ	30,577	220,000	- 7 -
10	人民銀行	ガルラスコ	11,440	83,996	- 7 -
11	カリアリ銀行	カリアリ	448,940	3,149,218	- 7 -
12	シエーナ人民銀行	シエーナ	94,355	803,800	- 8 -
13	カモニカ溪谷銀行	ブレーシャ	36,060	300,000	- 8 -
14	サン・ジョルジョ金庫	ジェノヴァ	109,646	950,228	- 8 -
15	人民銀行	ヴァレンツァ	19,577	171,500	- 9 -
16	モンツァ銀行	モンツァ	35,754	333,000	- 9 -
17	ムジェッラーナ人民相互銀行	スカルペリア (フィレンツェ)	1,579	14,993	- 9 -
18	農業商業銀行&ボルチェヴェーラ貯蓄金庫	ボルツァネート (ジェノヴァ)	3,547	30,000	- 9 -

19	農業工業人民 相互銀行	ヴァプリオ・ダッ ダ	5,082	54,207	—10—
20	信用共済人民 銀行	パルマ	5,081	51,301	概算 10 倍
21	人民銀行	ローマ	5,085	50,050	—10—
22	農業人民相互 銀行	パラッツォーロ・ ドーリオ	15,050	170,000	準備金の 11 倍
23	イタリア農業 商業銀行	ボローニャ	76,661	888,940	—11—
24	人民銀行	サロ	10,481	130,000	—12—
25	人民労働銀行	ローマ	77,552	1,000,000	概算 12 倍
26	ローマニャ銀 行	ボローニャ	26,169	360,000	準備金 13 倍以上
27	人民銀行	ヴァレーゼ	2,700	39,087	—17—
28	人民相互銀行	マントヴァ	12,907	407,808	—30—
29	エミリア銀行	ボローニャ	22,061	930,387	—42—

なお、準備金比率の問題でフェッラーラは、前出「強制流通の廃止」(1880)で「銀行問題」(1873)を想起しながら、次のように強弁している。「33%の準備金がいかに習慣的で不可侵なのですか。それは私が考え、1873年12月にかなり詳しく説明した事をよく承知しています。少なくとも国々で法律で承認された何であっても、頻りに侵害されたり無視されたりしなかったと言われるものはありません。しかし、とりわけ、私は準備金の比例的数字は、もし我々が明らかに非論理的である事を暴露しようとしなければ、その〔紙幣〕発行が広がるのに応じて、それに反比例して減少するはずである事を証明したと思っています。」(*E. op. cit.*, pp. 437-8.)

- (49) 因みに、ファウッチは、フェッラーラの孤立した政治的経済的立場を示す文脈で次のように指摘している。「当時の経済学の著述家の中で、おそらくカッターネオ [Carlo Cattaneo 1801-1869]だけが、一完全に異なった文体によってであれ、厳粛で古典的着想をもって、一彼と同列にあっただろう。2人の偉大な連邦主義者、ミラノの民主主義者とパレルモの穏健主義者が、出会いの動機をもたず、彼らの仕事が相互接触なしの環境で構想された事を確認するのは不本意である。」Faucci, *op. cit.*, p. 16. 更に、サベッティは、「カルロ・カッタネオとフランチェスコ・フェッラーラは、連邦主義的か自治主義的タイプの組織原理によって、その国の自然、国民の政治意識、地方的、地域的タイプの公正が、……共同体 (commonweal) の福祉に利用されるであろうと主張する」(Sabetti, in: *Atti. ibid.*, p. 271.) と述べて、両者の思想的親近性を指摘している。

#### 参考文献

- Albergo, Giulio, [1855] *Storia di economia politica in Sicilia*, Palermo.  
Baldassari, Mario & Ciocca, Pierluigi, [2001] *Roots of Italian School of Economics and*

- Finance from Ferrara (1857) to Einaudi (1944), Vol. II*, Palgrave, Roma.
- Buchanan, James M., [1960] “La Scienza della Finanza : The Italian Tradition in Fiscal Economy”, in: *Fiscal Theory and Political Economy*, Chapel Hill : Universty of North Carolina Press.
- [1987] *Economics between predictive science and moral philosophy*, Texas A & M University Press.
- Bousquet, Georges-Henri, [1960] *Esquisse d'une Histoire de la Science économique en Italie, des Origines à Francesco Ferrara*, Libraire Marcel Riviere et Cie, Paris. (橋本比登志訳『イタリア経済学抄史』, 嵯峨野書院, 1983年。)
- Butera, Salvatore, [1988] “Realtà e prospettive dell'economia siciliana in alcuni scritti di Francesco Ferrara”, in: *Francesco Ferrara e il suo tempo Atti del Congresso*, Palermo, 27-30, ottobre, 1988, pp. 97-104. (以下 Atti. と略。)
- Candeloro, Giorgio, [1976] *Storia dell'Italia moderna Vol. V*, Feltrinelli, Milano.
- Castellano, Cesare, [1988] “La libertà nel pensiero e nell'azione di Francesco Ferrara” , in : *Atti.*, pp. 45-64.
- Economisti italiani del Risorgimento*, [1933] a cura di Attilio Garino-Canina, Torino.
- Einaudi, Luigi, [1953] *Saggi bibliografici e storici intorno alle dottrine economiche*, Roma.
- Fauci, Riccardo, [1995] *L'economista scomodo, Vita e opere di Francesco Ferrara*, Sellerio editore, Torino.
- , [2002] *Breve storia dell'economia politica*, G. Giappichelli Editore, Torino, pp. 105-6, pp. 171-73.
- Ferrara, Francesco, [1955] *Opere complete Vol. I, II*, [1956] Vol. III, IV, a cura di Bruno Rossi Ragazzi, Roma.
- [1961] *Opere complete Vol. V*, a cura di Federico Caffè, Roma.
- [1965] *Opere complete Vol. VI*, [1970] Vol. VII, a cura di Federico Caffè e Francesco Sirugo, Roma.
- [1972] *Opere complete Vol IX, X*, a cura di Federico Caffè, Roma.
- [1976] *Opere complete Vol. VIII*, a cura di Riccardo Fauci, Roma.
- [1986] *Opere complete Vol. XI*, a cura di Piero Barucci e Pier Francesco Asso, Bancaria Roma.
- [1934-5] *Lezioni di economia politica*, 2 Vol., a cura di Gilda De Mario-Tesoro, Bologna.
- [1990] *Scritti di statistica di storia di Francesco Ferrara*, a cura di Domenico Demarco, Torino.
- [1992] *Opere complete Vol. XII*, a cura di Piero Barucci e Pier Francesco Asso, Bancaria Roma.
- Finoia, Massimo, [1980] *Il pensiero economico italiano 1850/1950 la scienza economica in Italia profili di economisti bibliografia del pensiero economico italiano*, Biblioteca Cappelli, Bologna.
- Ganci, Massimo, [1988] “Le ragioni del congresso «Francesco Ferrara e il suo tempo»”, in : *Atti.*, pp. 21-23.
- Gioli, Gabriella, [1988] “Note sul sistema finanziario di Antonio Scialoja e le considerazioni

- di Francesco Ferrara”, in : *Atti*. pp. 275-305.
- 日向寺純雄, [1987] 『イタリア財政学の発展と構造』, 税務経理協会。
- 黒須純一郎, [1997] 『イタリア社会思想史』, 御茶の水書房。
- La Francesca, Salvatore, [1988] “Moneta, credito e banche in alcuni scritti di Francesco Ferrara”, in : *Atti*. pp. 343-368.
- Luzzatto, Gino, [1960] *Storia economica dell'età moderna e contemporanea, parte II l'età contemporanea*, Padova.
- Malvica, Ferdinando, [1836] “Sul cabotaggio fra Napoli e Sicilia — Memoria di Ferdinando Malvica”, in : *Effemeridi scientifiche e letterarie per la Sicilia*, Palermo.
- 松浦 保, [2001] 『オリーブの風と経済学—イタリア人の考え方—』, 日本経済評論社。
- Maurandi, Pietro, [1986] *Giuseppe Todde un economista alla scuola di Francesco Ferrara*, Franco Angeli, Milano.
- Mortillaro, Vincenzo, [1834] “Considerazioni del barone Vincenzo Mortillaro sul cabotaggio tra Napoli e Sicilia”, in : *Giornale di scienze, lettere ed altri per la Sicilia, a XII, Vol. 48.*, Palermo.
- Nardi, Adriano, [1988] “Francesco Ferrara e la scuola austriaca di economia, Primi elementi di un confronto”, in : *Atti*. pp. 307-325.
- Palmieri, Niccolo, [1826] *Sulle cause delle difficoltà attuali dell'economia agricola della Sicilia e i mezzi per porvi rimedio*. Palermo.
- Pantaleoni, Maffeo, [1890] “Scritti di statistica di Francesco Ferrara”, in : *Giornale degli Economisti*, Roma.
- [1908] “Francesco Ferrara”, in : *Dictionary of Political Economy* (a cura di R.H.I. Palgrave), MacMillan, London, pp. 736-37.
- [1931] *Principii di Economia Pura*, Fratelli Treves, Milano.
- Pareto, Vilfredo, [1896-97] *Cours d'économie politique*, 2 Vol., Lausanne.
- Patriarca, Silvana [1999] *Numbers and Nationhood, writing statistics in nineteenth-century Italy*, Cambridge University Press.
- Pavanelli, Giovanni, [1988] “Note su moneta e corso forzoso nel pensiero di Francesco Ferrara”, in : *Atti*, pp. 327-341.
- Pecchio, Giuseppe, [Nuova Edizione 1994] *Storia dell'economia pubblica in Italia*, introduzione di Mario Talamona, a cura di Gianmarco Gaspari, Sugarco Edizioni, Varese.
- Remacle, Bernard Benoit, [1838] *Des hospices d'enfants trouvés en Europe et principalement en France depuis leur origine jusqu'à nos jours*, Paris.
- Romani, Roberto, [1994] *L'economia politica del Risorgimento italiano*, Bollati Boringhieri, Torino.
- Romeo, Rosario, [1969-1984] *Cavour e il suo tempo* 3 Vol. Laterza, Roma-Bari.
- [1. ed. 1984, 3. ed. 1998] *Vita di Cavour*, Roma-Bari. 柴野 均訳『カヴールとその時代』, 白水社, 1992年。
- Roria, Achille, [1900] “Francesco Ferrara”, *Economic Journal* 10 : pp. 114-7.
- , [1953] *Corsi di Economia politica*, UTET, Torino.
- Sabetti, Filippo, [1988] “Un precursore siciliano di «public choice»? : Francesco Ferrara e lo

sviluppo delle scienze sociali in nord America”, in : *Atti.*, pp. 259-274.

Schumpeter, Joseph A., [1954, 1994] *History of economic analysis*, edited from manuscript by Elizabeth Booddy Schumpeter, New York, Oxford University Press,; Reprinted by Routledge, Introduction by Mark Perlman, London. (東畑精一訳『経済分析の歴史』3 岩波書店, 1980 年)

Terme, J. F. et Monfalcon, J. B., [1837] *Histoire statistique et morale des enfants trouvés suivie de cent tableaux*, Lyon et Paris.

Weinberger, Otto, [1940] “The Importance of Francesco Ferrara in the History of Economic Thought”, in : *The Journal of Political Economy*, Vol. 48, Num. 1.

(くろす じゅんいちろう 明海大学経済学部教授)

---

---

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 49*

発行所 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 2003年3月31日

印刷所 新宿区早稲田鶴巻町 565-12

(有)啓文堂松本印刷

---

---

